明治廿六年六月廿四日發行

女鑑

第四十四號

東京國光社

女鑑第四十四號目次

國依媛



女鑑　第四十四號

女鑑

服從と敬從

新に戰に勝てる者が、敵國の婦人を生擒り、載せて歸れりと云ふ事實は、支那、西洋の、古代史を讀むものゝ、よく見出すところなり、啻に、古代、支那、西洋のみならず、近く、我が朝にても、明治維新の際、江戸人、飄零四散し、薩長人、志を得、其の江戸城に乘り込むや、江戸士人の子女は、賤業に身を寄せて、活を偸むもの多く、而して、之を弄び、其の遊樂に供したるものは、薩長の、新に戰に勝てるものなりしを見るも、この事實を、史上に確むべきなり、

人生、婦人の身となる勿れとまで、嘆息せらるゝところの婦女子なれば、其の境涯の憐むべきこと、今更、いふまでもなかるべしと雖、婦人の地位の、此くの如きは、固より、社會不整頓より來れる結果にして、只管、服從を以て、婦人の美德となしたるは、みな、古昔、不整頓社會の遺物となさゞるべからず。

理もなき服從は、不可なり。されども、之に反動としての働は、最、不可なりとす。婦女子たるもの、天賦に弱きものにして、其の男子に服從すべきは、先天的に定まれる運命よりするものにして、男子に服從奉事するは、已を得ざるものなりとなさば、假令、よく男子に事へて、一生、謙厚温良なりとも、何の稱すべきものあらんや。人と禽獸とは、先天的に、強弱尊卑の定まれるものなれば、禽獸の、人に服從するは、已を得ざるより出づる自然の法則なり。只、自然の法則

にて、禽獸の道德心よりするものにあらざれば、彼れ如何に、人に服從したりとて、禽獸に、敬愛の情ありといふこと能はざるなり。

之に反し、女子に至りては、男子と同じく、人間の智能を備へ、其の皇神の兒子たる資格に於いては、毫も、異なるところなしと雖、其の道德よりして、よく男子を敬し、男子を愛し、溫柔を以て、一生の本事となし、毫も、圭角を現さずして、一家の和樂、一社會の安寧を維持するものたり。これ、女子の尊ぶべきところにして、女子は、服從にあらずして、敬從するもの、即、已を得ざるよりして、男子に降參したるにあらずして、其の意識より、自、求めて、卑きに就くものたり。凡て、道德に貴ぶところは、此の意識より、自、斷じて取るところにありて、人は、善に惡に、自由に、其の方向を轉ずる能あれども、自、努めて、善に

赴くを以て、其の善は、更に貴ぶべき理にして、若し馬車馬などいへるものゝ如く、必ず一定の方向に進む外、行くべき路なきものならんには、其の善をなすは、已を得ざるより出でたるものにして、更に、善の貴ぶべきを見ざるに至らんかし。女子の柔道も、更に、此くの如し。女子は、如何にするも、男子に勝ち得るものにあらざるが故に、已を得ず、男子に、服從するにあらずして、女子の道徳心より、自ら、降りて、坤儀に法るものなるのみ。

然るに、道徳の主意、明かならざる日に當りては、男子も、女子を辱しめ、女子をして、強ひて、已に服從せしめ、女子も、亦、辱を忍びて、力に屈したるものありき。これ、世の不整頓、不進歩の不幸にして、免れ得さるところとす。只、今日、女子の學問智識の、稍、伸びんとするに及び、女子にして、其の實力(即、

學問智識）の、或は、普通の男子にも、肩を比ぶべき程なるを見、祖先以來、女子の敬從は、總て、力に屈したるものと誤信し、急に、男女同權などいへる言葉を濫用して、叛旗を、男子に翻すが如き擧動あるは、服從と、敬從とを混じたる罪にして、道德上より、自、降りて、男子に恭順なりし祖先たる女子を辱むるものといはざるべからず。

吾人の希ふところは、男子たるものは、宜しく、昔人の、力を以て、女子を屈したる如き念慮を、再、起すことなく、即、道德上より、女子を愛遇し、女子も、亦、意識より、自、降りて、男子に敬從せんこと、是れり。之を要するに、實力的男女合同の昔に反し、道德的男女和同の天地を造り出ださんこと、是なり。

論説

良妻の説

武谷水城

國に良臣あるは、國の慶也。家に良妻あるは、家の慶也。昔者、唐の名臣魏徴、其の主李世民に謂て曰はく、願はくは、臣をして良臣たらしめよ、臣をして忠臣たらしむる勿れ、と。夫、稷契、皐陶、君臣力を協せ、倶に尊榮を享く、所謂良臣也。龍逢、比干、面折廷爭し、身誅せられ、國亡ぶ、所謂忠臣也。徵の此言を爲すや、諷旨に出づると曰ふと雖、抑亦忠臣ある時は、國の慶時には非ざる也」。世の良妻と節婦とに於けるも、時と所とを以てすれば、亦太だ似たるもの有り。塗山四百年の起業を扶け、有莘六百歳の開基を助け、子孫共に永福を享く、所謂

良妻也」令女鼻を斷ち、饕婦崖に沒し、共に身を捨てゝ、節を取る、所謂節婦也。兩婦自ら此至慘を嘗めて、而して辭せざる所以のもの、他に、死に優る節操の、汚すべからざるもの有るに因ると云ふと雖、抑亦節婦ある時は、家の慶時には非ざる也。

然らば則、良妻とは如何なる者ぞや。西國の詩家「ボルンス」、嘗て良妻の性質を分析して曰はく、良性情四分、好意見二分、智巧一分、美麗、容貌美目の他、擧止の嫺雅等をも、亦含む。）一分、餘殘の二分は、產業、交遊、若くは尋常外の良教育等、分取各意に任す、と。「ヘンリー、テーロル」は則曰はく、眞正の良妻は、能く其の家をして、夫の安寧休息の處と爲し、耳目を慰め、心神を安ぜしめ、家事を懸念せずして、其の爲さんと欲する家外の職を濟さしむるにあり、と。或

は亦曰はく、家を擧げて、良好の鳥籠と爲し、夫をして安息躱身の所と爲さしむるもの、是れを良妻と謂ふ、若し婦にして、一家を安寧快樂の好所と爲す事能はずんば、夫たるものは、憐むべき無家の浪人と可謂也、と。

此等の解、盡せるや、否やを知らず。又彼の良性情、智巧等の中、猶廣義を要するものあるべしと雖、亦以て西國の識者が、婦女の本性と認定したるものを、概見するを得べし。之れ蓋、彼の稟性に徵し、天賦に質して、過らず。古今に通じ、内外に亘りて、誣ふべからざるものと謂ふべき也。而して之を、我が東洋（特に本邦、及漢土）の國風に觀るに、所謂良妻の性質中、猶一の缺けたるものあるを認む。何ぞや、曰はく、節操是也。

夫忠臣ある秋は、國の慶時に非ず、節婦ある秋は、家の慶時に非ずと雖、抑亦、

家國時に變無き能はず。家に汚隆あり。人に窮達あり。獨平世に處して、變時に處する方を得ずんば、眞正の良妻と謂ふを得べからず。少しも、我が東方彝倫の國に於ける、眞正の良妻と謂ふを得ず。治世の良臣、亂世に處して節を變せば、豈良臣と謂ふを得可けんや。治世の良臣、即亂世の忠臣、而る後始めて良臣の全節を見る。平時の良妻、即變時の節婦、而る後始めて良妻の全節を見る。細川氏の室、變に逢はずんば、必ず所天を助けて、家國を興す良妻たりしならん。山内氏の夫人をして、變に逢はしめなば、必ず細川氏の爲す處を爲し、ならん。之を我が邦特種の氣風とす。一家危からんとして、復安く、一國亡びんとして、再び興るもの、亦皆此の氣風の磅礴したるものに非ざるは無き也。「ジヨセフヰン」、奈翁の貞后たるも、「ポウハリナス」の節婦たる事能はず。「ヲーシエル」、ラツセル氏の

貞婦たるも、「ウォーガム」の家を存する能はず、而して共に、彼の邦の貞婦たるを失はず。蓋彼の國風、身を本と爲し、重と爲し、家を末と爲し、輕と爲す。我が族制彝倫の國風と同じからず。）

由是觀之、人の世に處するや、常あり、變あり、正あり、權あり、本あり、末あり、常道正路を踏むも、變に應じ、權に處する、其方を得ずんば、眞正の良妻と謂ふを得ず。若夫、節操義烈、偏に變時の出來事のみを賞揚し、之を以て婦人の常道と爲すものあらば、本末を轉倒するものと可謂也。

交際上より生ずる女子の弊風

關　以雄

女德教練の論なるもの、古來の特性と、時勢に推移する法とを幷せて、一概に觀

じ來れば、既に、其の論を盡したる如き趣ありと雖、未、女子弊風の根源するところは、交際なるものが、之が病藪たることを講ぜざるは、蓋、誤筆落猿の失と謂はずんばあらず。彼の孔子孟子の徒が、女子の交際は、最、愼むべきことゝなるを諸して、男は眷屬にあらざれば、刺を通ぜずと謂ひ、幽間は、女德を愼獨する本にして、夜行くに燈を以てすと謂ひ、瑣細の微事までも、之を警戒せしは、其の要旨とするところ、交際上より生ずる弊患を、杜絶せんと欲するに過ぎざるや明かなり。輓近、此等監禁的、束縛主義なる關門をして、其の開閉の自由を、女子に與へたるが故に、交際の頻繁なるも、友侶の萠苗も、專、自己の勝手に歸したるが爲か、近時、女流社會、交際の間に於いて、一種の、群集的より生ずる混同弊源を釀成し、施いて一家に及ぼし、一族に及ぼし、果ては、趨勢の風潮とま

で、進歩せんとす。余や、直接に、女子の中等教育に的りたる當時に於いて、學校群集的より生ずる、一種の弊風現出するを詳にせることありき。蓋、此の弊習は、集大成の結果より、逆來したるものなるを以て、容易に、學校教育の調理し得べきところにあらずして、其の勢力は、飜りて、一家風を凌壓する作用を有せざるはなし。此くの如く、個人的女性の弊風が、漸次に、今日の如く、進歩を加へて、途に昇らんには、遂に、國家的女性も感化せられて、社會行政の上にも、其の反應を觀るに至るや、必然の理にして、亦、怪しむべきなからんとす。世の後進女子の爲に、俑を作る任にあるもの、須らく、女子の弊源は、主として、交際上より、發動し來るを諒察せずんばあるべからず。其の細論は、更に、篇を改めて、之を審にすべし。

人倫の要義（承前）

大林弘一郎

孝

凡そ、人の行ふべき道は、忠孝を以て本とす。たとひ、衆善ありとも、忠孝に缺くる所あらば、其人は全人に非ず。其行は全行にあらず。誠の人道に疎きものと云はざるべからず。さて、忠の意義は、固より廣大なれば、之を言ひ尽さんとするは容易に非ず。されば、前號に於て、たゞ其表面をのみ論じ置きたり。因て今こゝに、少しく之を詳かにせんとす。

抑も忠と孝とは、其事ふる所と、尽す所との區別あるによりて、其名こそは異なれども、其本は則ち、一にして二あることなし。二ならざるが故に、一人にして忠

臣ともなり、孝子ともなり、孝女ともなり、節婦ともなることを得べきなり。他の國々は知らされども、我皇國にては、忠孝兩全なりがたしなどの僻言は、決して其事實あるを見ざるなり。其故いかにとなれは、凡そ人間と生れては、必ず情なきものはあらじ。情あれは、必ず物を愛するは自然の理なり。愛する所、孰れか最なるか、親を愛する最も厚し。是乃ち人情の至然に出でゝ、人々幼にして其親を愛し、長じて其長を敬することを知らざるものあることなし。親を愛することの至りは、即ち孝にして、長を敬する心は、則ち悌なり。孝悌の至りは、則ち人道の至極なれは、忠順の道も、亦自ら全き道理なり。故に古語にも、孝悌にして、上を犯すことを好むものはあらずと。上を犯さゞるものは、上を敬するものなり。上を敬するは、即ち忠なり。故に親を愛するは孝にして、親に孝なるは、是れ君

に忠なるなり。能く君に忠なるは、則ち親の志を行ふものにして、孝の大なるもの也。是に於て、忠と孝とは、全く異名の同物にして、其本の一身に存して、決して二樣ならざる理を知るべきなり。然らば何故に、其名を異にするぞと云ふに、人には、必ず公私の區別なかるべからず。公と私の區別立たば、親を私とし、君を公とするは、自然の倫序よりしても、然らざるべからず。公私內外の秩序明かにして、人情自ら其間に伸ぶることを得べし。故に門內の治は、恩、義を掩ふ、門外の治は、義、恩を掩ふと云へることあり。禮敎にて、內外尊卑上下の區別を明かにし、人々各其禮分を愼むは、古　神聖の、この大御國を安んじ給へる宏謨にして、臣民の禮順に篤きは、國家の安寧、無疆なる所以の大本とこそ云ふべけれ。その上に、我　大君は、神代の昔より、一系綿々の　皇統、變はらせ給ふこと

なく、臣民は、皆神代の遺民、或は歴朝の　皇派より出でたれば、外は君臣の義あれども、内は實に父子の親あり。此間に、一種特殊の情ありて、愛敬の念、自然に厚く、上下の分は、嚴然として乱れず。されば、孝子となるものは、必ず忠臣にして、忠臣必ず孝子なり。　聖勅の、爾臣民、父母に孝なるは、忠良の臣民たりとの　御旨趣に鑑みて、自ら明白なり。

ちはやふる神代のちぎりたえもせず今も仕へて年ぞ經にける

君をいのる心のいろを人とはゞたゞすのもりのあけの玉がき

此等の歌を諷詠して、君臣の情の、誠に藹然として、春日の如く、和氣洋然、一點の邪氣なきもの、即ち我　大御國の彝倫の敎正しく、忠誠の情至れるを知るべきこゝにころ。

さて、孝とは如何なる故に、忠と其名を異にして、何故に私となり内となる理あると云ふに、こは、たゞ事ふる所によりて名を異にし、情の伸ぶる所に依りて、公私の別を生じ、義の存する所に由りて、内外の分を立つるのみ。固より禮分を嚴にして、狎れ犯す弊なからんが爲にして、敢て君と親との愛敬の、誠に深淺厚薄ありとの意あるにあらず。

夫天地間に、我身の生ずるは、誰によるや、必ず父母によらざるべからず。父母の子に於ける、其慈愛至らざるなし。其恩の重大なるは、山も海も比すべきにあらず。子たるもの、如何にして之に報ずるや、たゞ愛敬の二字あるのみ。愛敬は孝の本なり。人の行は、孝より先なるはなし。故に其親を愛敬せずして、他人を愛敬するものは、之を悖德悖禮と云ふ。されば、先其親を愛敬して、他人の親に及ぼ

ずは、内外の順序なり、又君臣の義は公義にして、父子の情は私親なり。内愛敬を私親に盡して、外公義に順從するは、即ち入ては則ち孝、出ては則ち弟なるものなり。孝悌亦其本は一にして二ならず。ゆゑに、孝は親に事るに始まり、君に事るに中し、身を立つるに終るなり。さて、その親に事るに方りてや、或は頑嚚にして、事を解せざる父母なきにしもあらず。又或は姦惡不善を謀る父母なきにしもあらず、或は驕淫節なき父母なきにしもあらず。不幸にして、之れが子たるものは、如何にしてか、其道を盡すべき、或は舜の如き艱憂なかるべからず。或は閔子騫の如き困苦なかるべからず。其行ふべき所は、萬差千別なれども、要するに、其親を安んじ、不義に陷らしむることなくして、其養を卒へ、子たる道を盡くすべきのみ。故に、父母の命に從ふのみを、孝と云ふべからず。不義に方りて、必

ず之を爭うて、義に從はしむるは、子たるものゝ孝行なり。父母に事るに、幾をみて諫むとは、不善不義を、幾微にして漸く發せんとする時に於て、諫め止むるを云ふ也。又或は父母過ありて罪あらば、子必ず之を爭うて、己れ其罪に服せんとするが如き、信に父母を愛するものに非ざれば能はず。父母難あらば、身之に死するもの、亦孝子の本分に非ざるはなし。これ我身体は、本之を父母に受けたるものなれば、其養育の恩とを合せて、之を父母に報ゆる義なり。人は何故に忠孝を尽さねばならぬと思はゞ、先己れの身の本を考へ見るべし。我身何故に生じ、何に依て長ずることを知らば、必ず君父を尊敬する念を生ずべし。此一念の發する所、則ち忠孝の性、自ら人に存すること、千万人皆同じきを知るべし。父なければ我身生ぜず。母なければ我身育せず。故に父は至尊にして、母之に次ぐ。父を尊

嚴にすることと、天と同じうするは、本を厚うすることとの至なり。我　大君は、上古の昔より、臣子の宗家にまし〳〵て、常に天下に父母とならせ給へば、猶是れ臣子の父祖宗室の懿親あるが如し。故に忠順孝敬、少しも父母に奉ずると異ならず。只其上下の分と、公私の別に依りて、恩を主とすると、義を主とするとの差異あり。禮義の上に、敬と親との小區別あるに過ぎざるのみ。凡そ、人倫日常の行事より、世間萬般の務に至るまで、一に忠孝の二道に關せざるものなし。一擧一動も、必ず粗慢ならざることを勤めずんば、九仞の功を、一簣に欠くことなしとも謂ひがたし。　聖勅の、緩急義に殉し、祖風を顯彰すべしとの　聖旨、全く天下をして、孝順ならしめんとの　叡慮に出で、忠孝の要道を以て、天下を順にし給ふ　皇謨、廣大精微を極めたりと云ふべき也。臣子豈に欽戴せざるべけんや。

然るに、世には一種の邪教あり。其行ふ所は禽獸なり。其言ふ所も禽獸なり。是則ち西蠻の禽獸國より出づる教なり。（近來西洋諸國にありても、少しく、人に勝りて、學識あるものは、皆彼の邪を辨析すと云ふ、）其教は則ち、人の父に孝なるは、眞の孝にあらず。君に忠なるは、眞の忠にあらず。父には大父あり。大父とは天父にして、天の上帝なりと。上帝實に我を生めり。父母は但一時の假合のみ。故に、たとひ、生父母に孝ならずとも、上帝即ち天父に孝ならば則ち可なりと。又現在の君上を以て、一時の假合となし、上帝を大君となして、君を小君とす。故に君に不忠なれども、上帝に忠ならば則ち善しと。彼れが無上の至尊とする所は、無形の上帝即ち天主にして、其輕蔑する所のものは、則ち現在の君父にして、我が最も尊重する所のもの也。其大本の、我　大御國の教に反するもの此の如し。豈に亦甚しからずや。彼説く所を究めは、父母君上は愛

敬するに足らず。無形の空想に出づる天主を、無上の至尊とし、其命によりては、君父に刄を俘するに至つても懼れず。これ禽獸の禽獸たる所以にして、人間よりして之を見れば、其慘憺の狀、見聞するに堪へざるなり。且又彼國の國体は、卑陋にして、已に君臣の大分なるものなし。皆同等の蠻族より、其首魁を立つるものなれば、初めより君臣の義なるものは、知るに由なし。故に其敎法の卑陋なるも、固より其當然なり。故に禽獸には、禽獸の道ありて足れり。彼れに於ては、固より不足なる所なかるべし。彼敎を以て、之を我　大御國に施すに至つては、之れ獸を牽ゐて我を食ましめ、我を夷狄にし、我を禽獸にせんとするもの、其害毒の及ぶ所、豈大ならずや。彼徒動すれば則ち曰く、我が敎と雖も、君父に忠孝ならざるに非ず。唯天主に忠孝を盡して、現世の君父に及ぶなりと。されど然

り。故に之を邪と云ふなり。第一に崇敬すべき現在の君父を措きて、有無測るべからざる天主に忠孝を竭くすとは何事ぞや。人倫の大道は、此一事にして既に廢壞せり、其本末既に顚倒せり。其他豈に言を待たんや。我大御國に生れて、かかる醜しき教法を奉ずるは、如何なる僻心ぞや。これ獨男子のみならず、婦人女子の、之に心醉するもの、亦甚多しと聞く。如何に人間となりたるが悔しとて、強て禽獸の群に交らはんとするは、愚の極とやいはんか。いかに慨すべき至りにあらずや。

大君のみことかしこみいそにふりうなばら渡る父母おきて

惜からぬ身ぞをしまるゝたらちねの親の殘せる形見と思へば

父母がかしらかきなでさきくあれといひし詞ぞ忘れかねつる

君のため世の爲なにかをしからん捨てゝかひある命なりせば

此等の歌を玩味せば、人臣人子の誠意心情の、潔く壯んなる氣象形狀、目前に見るが如し。眞の人たらんものは、かくてこそ。いかでかは獸行に列るべき。いかでかは夷狄の教を奉ずべき。いかでかは尊き君、尊き父を棄て卑しむべき。これの尊き大御國人にして。

（未完）

史談

國依媛

馬醉木滋野

兄弟姉妹は、ともに、親より分れたるものにして、一幹の兩枝の如く、一氣の分體なれバ、恩愛の情は、一身の如くなるべく、相助け相救ふことは、左右の手の如くなるべけれバこそ。

國依媛は、的臣の祖口持臣の妹にて、仁徳天皇の皇后磐之媛命に、仕へまつりし人なり。皇后は、嘗て、紀國にいでまし、熊野にいたりて、其處の御綱葉を取らせ給ふ。國依媛侍りしたがひ奉る。天皇は、皇后のいまし給はぬ程に、八田皇女を、宮中に召しいれ給へり。皇后は、還啓し給ひて、難波の濟にいたり、天皇の八田皇女をめしつと聞召し、大に恨み給ひ、やがて、其の採りし御綱葉をぞ、海に投げ給ひて、岸に着かせ給はず。河をさかのぼりて、山背にいでまし、筒城の宮にましませり。天皇は、國依媛の兄、口持臣に勅して、皇后をめさしめ給ふ。こゝに、口持臣は、筒城宮にいたり、皇后に啓して、かへらせ奉らむとすれど、黙けて御答へだに給はらず。口持臣は天皇の勅命を空しくして、還ること能はず。雪のふるに濡れつゝ、皇后の殿前にふし、日夜を經て、まかり申さゞりき。時に、妹の國依媛は、皇后の側に侍りしが、其の兄の、潦にぬるゝを見て、悲しみに堪へず。歌をつくりて曰はく、

山背の筒城の宮にものまをす我が兄を見れバ涙ぐましも

皇后は、國依媛よのたまはく、何ぞかくは泣けるると。國依媛啓さく、今、庭にふし

てものまをすは、妾が兄なり。涕にぬれつゝ、まかり申さず。猶、ふして拜謁し、啓し奉らむとす。かれ、兄の志を悲しみて、泣けるのみと。皇后きこしめして、宣はく、汝が兄に告げて、速にかへらしめよ。吾は遂にかへるまじと。國依媛、かしこまりて、これを兄に傳ふ。口持臣は、即、かへりて、天皇に復奏ことを得たり。友愛の情、まことにかくこそあらむかし。

清水太郎左衛門の母

松野操雄

母の輔導の善惡が、直に其の子に影響を及ぼすことの廣大なるは、古今に徵して明かなることにして、世の人の、とくに知れるところなり。されバ、當局の人々が、心を女子教育の上に注がれ、もはら、世に賢母良妻多からしめんと勉めらるゝは、うべ然ることにこそ。實にや、小楠公は、慈母の惇々たる訓諭によりて、類まれなる忠節を全うせられ、大貳三位は、賢母の温々たる教導によりて、世に貞淑の名を殘せり。こゝに、相摸の北條氏政の家來に、清水上野介といひて、武邊、世に聞えたる士あり。その妻なるものも、相摸國の生れにて、きはめて力つよき婦人なりき。一

子を生めり。これを太郎左衛門とよべり。これ又、父と母との武勇をうけつたへて、膂力人にすぐれしかバ、おのれを恃みて人にほこり、傲慢無禮の事のみおほかり。母これをうれへ、いかにもして、此のあしき癖習を矯め直さんと思ひ、いたく之をいましめて曰はく、力強くして先陣にすゝみ、手づから敵をうつは、これ匹夫の勇なり。大將の器にあらず。むかし唐土の、楚の項王といへりしは、ちから飽くまで強く、よく千斤の鼎を扛げたりしも、烏江の戰に、軍敗れて命をおとし、漢の臣張良と申しゝは、その身軟弱なりしかども、智謀人にすぐれて、克く百万の強敵を挫げり。されど、一方の大將ともあらむと欲するものゝ肝要なるは、一己の力にあらずして、威ありてたけからず、勢によりて人を侮らず、義理を守りて、禮節を正しうし、人をあはれみ、恩恵をほどこし、寡欲にして色に溺れず、軍法武術を鍛錬して、敵をなびけしたがふるをぞ、あつぱれなる士人とはいひつべき。さるを、おのが力を恃みて人をあなどり、傲慢無禮ならむには、禍かならず家におよびて、汝が父上野殿の武勇までを黷しつべしと、いたく耻ぢしめ諫めしかど、太郎左衛門、大におのれの過を悟り、前非をくいて、それより後は、川狩鷹狩等のあそびをやめ、一室

にこもり居て、もはら軍書をよみ、兵法を講じけるほどに、智勇兼備の士となりて、世の人、これをおそれ重んじけりとぞ。さて、この母は、母の力強かりしことは、或る日、ものまうでして、ある山の坂口にかゝりける路に、大きなる牛の、米俵ふたつ負へるが、あとあしを踏みはづして、わづかに岩かどにかゝりてとまりたるに、若し荷繩をきりとかむ、牛は谷底に墮ちて死ぬべし。さりとて引きあげむやうなければ、牛ひきは、あきれまどひて困じはて、牛はかた息になりてあへぎあへり。太郎左衞門の母、これを見て、あはれみに堪へず、あたりの人をしりぞけ、徐に輿よりおりて、ただひとり、牛の側にたちより、荷をつけながら、牛をいだきて、かろ〴〵ともたげ、道の眞中にひきたてたり。之を觀居しものども、目をおどろかし、舌をまきておそれたりとぞ、かゝる怪力のうまれつきなれど、豪氣にてあらだゝしく、婦人らしくもあらざるべきを、さはなくて、ことに道理にさとく、慈愛ふかゝりし故に、さしもの傲慢無禮のその子を敎へて、血氣の勇をおさへ、しかのみならず、智術を磨ぎ、節義を重んずるに至らしめしは、げに類なき賢母にあらずや。

家政

育兒小言（三十一）（第四十一號の續）

武谷水城

家裏の感化の事

小兒を教成するには、教訓と感化との二途ありて、離るべからざる事、恰も鳥の双翼の如く、車の兩輪の如く、相待て其効を濟すものにて、兩者何れを輕重すべからずと雖、中に就て、感化を以て、本と爲し、重と爲す、而して感化は家裏の感化より大なるは無し、彼の胎教を重んずるも、母の思想行爲は、無形の裏に胎兒を感化して、其性行、思想、の種子を作るが故のみ、況んや、生を此世に受けし後をや、又況んや、小兒の耳目心神の機能も次第に發達して、直に外來の事物に感應する頃に至りては、感化の至貴至重なる事、復た物の比すべきもの無るべし、

支那の古き書には、家庭の訓を說く事至れり、歐洲の舊き諺にも、亦、家は人を成すと云へり、されど、人間生涯の性行を作るは、其生れたる家裏より善きはなく、又家裏より切實なるは無し、貧富貴賤の別なく、男女上下の差なく、極善の化を受る

も茲にあり、極惡の性を禀るも茲にあり、賢者と爲り、愚者と爲り、善人と爲り、惡人と爲り、或は身を立、道を行ひ、或は身を亡ぼし、家を覆す等、何樣の果を結ぶも、能く其根元に溯りて糺す時は、幼時の家裏の感化に因る事にて、最初母の乳養を受し時よりして、智愚賢不肖の別なく、己の身を圍繞する氣風の爲に感化せられ、目に見、耳に聞て、深く純白柔軟なる腦裏の明鏡に印識したるもの、次第に增大して、成長の後の、思想、行爲、の根脚と爲りて、終身變せず、死に至らざれバ止ざる也、されど、幼時家裏の感化と、慣習とは、人間生涯、幸と不幸との岐路にして、其感化の如何に因りて、無知なる小兒は、何れの路にも進むべく、何れの色にも染めつべし、一度右路に進みしものは、容易に左路に還る事能はず、一度紫色に染みしものは、復た赤色と爲す事能はず、揚子が逵路に哭し、墨子が練絲に泣しも、理り深きことにこそあれ、

小兒幼時、家裏の感化は、獨り其兒成長後の、思想行爲と爲るのみならず、又實に、天下國家の風儀の根元を爲すなり、家は人を成す事、事實に徵して違ふ無んど、其人集りて又家を爲し、村落邦國を爲すものなれど、國家の光輝は、各家の家裏より

發射する光線の反射に外ならず、家裏にて小兒の心田に蒔し感化の種子は、極微のものと雖、後來必ず、天下國家に發生して、特種の光輝を放つなり、忠臣孝子も家裏より出、乱臣賊子も家裏より出、一時の輿論も、一國の氣風も、亦皆家裏より出づ、之を邦國は乳養より成ると云、家裏の感化の勢力、强き事彼が如く、普き事此の如し、而して家は實に婦人の版圖也、邦國也、婦人家裏の性行感化は、能く小兒の品格を成す、小兒は實に母の再度の生涯也、而して、小兒の品格は亦大人の核也、小兒は大人の父なり、天下國家の氣風も、畢竟此大人の父の、思想行爲の發出して、勢力を得たるものに外ならぬ也　於茲乎、母の權力無限と云ふべく、其責任や、至重と謂べし、

家裏の感化の至貴至重にして、假令何樣善良の敎訓を爲すとも、感化良からぬ時は、毫も敎訓の功なきのみならず、時に却て害ある事は、世間の事實に徵して知るを得べし、西儒「ヘルベルト」の言に、善良の母一人は、百人の學校敎師に値すべし、母の家裏にあるや、家人の耳目と心とを引く磁石なり、不識不知の裏に、母を學び習ふ事、已時なく、母の此等の自然の摸範は、敎誡の上に出る事、遙かに遠し、摸範は、

實行上の教訓也、無言の教師也、能く口舌の教る事能はざるものを教る也、悪しき模範の前には、極善の教訓も功能少く、或は全く無効のもの也、行爲の模範に從て、言語の模範に從はざるは、人性の常也、特に小兒に於ても然りとす、されど、人苟も其慣熟する己の行爲、其論説する所の教訓と、相異る時は、其教訓は獨り益無きのみならず、僞善を人に教るものにて、其害たるや、甚大也と、此等の言、育兒の重任ある人の母たるもの、日常記憶に存し置て、時々其行爲に顧みなを、其功德少からざるのみならず、寔に家國の幸福なるべし、

漬物鹽加減（三）

駒込京軒

京糸菜漬

關東には少なけれど、近來京の壬生菜（水菜）の種を植ゑて、所々にあり、一株にて百莖餘りあり、かぶの根を切り、庖丁目を多くいれて、土を洗ひ、甘鹽にて、つけるがよし、水あがりても、あくといふもの、少もなし、上品なる物なり、奈良漬、味噌漬の香の物に附合はす、

糠味噌漬 又酸漬ともいふ

世俗には、取遣せぬ物のやうに、いひならはしゝかど、とるにも足らぬ事共なり、又新には、急に出來がたき物のやうに思ふやからもあれば、心得の爲に、爰にしるす、糠一斗、塩五升、右糠の小米を、よくふるひ取りて、塩五升に、水五升を、鍋にて煮かへし、冷の水なれば、一夜さまし置き、糠にまぜて、桶につけるなり、しやうゆ樽ならば、此分塩にて、見はからひあるべし、あらたに拵へたる當座には、毎日たび／＼、手を入れて攪廻すべし、故き澤庵大根を、四五本、糠のまゝいれ、生大根、又莖でも、時の有合もの、茄子、瓜のたぐひ、何にかぎらず、漬けるたびごとに、塩すこしづゝ入れて、かきまはすこと肝要なり、かくして、十余日を經れど、糠よくなれて、故き糠味噌に異なることなし、又なれたる糠みそを、少にても種にいるれば、尤はやく、新糠の匂ひうせるもの也、ことさら新しきうちは、かんざまし、またみ酒、醤油のおりなどあらば、いれてかきまはすべし、味噌漬のみそ、又粕漬のかすなど、むざと捨てずして、万事心がけて、捨たらぬやうに、ぬかづけの中へいるべし、三十日ならずして、年久しく、たしなみたるぬかみそに、か

はる事なし、時々の物をつけて、其あぢはひをこゝろむべし、

大根味噌漬

甘鹽にして漬けたる澤庵大根を洗ひ、水氣を布巾にて拭ひとり、二時斗り陰干にして、たまりがちなる味噌につけるなり、一年立ちて、又洗ひ、別のみそに漬けおかむ、何年立つも、其味ひ、かはることなし、常々遣ふ小出しの味噌桶の底に入置くもよし、

奈良漬瓜

夏土用の中の、極上物の白瓜を吟味して、二つに割りて、中實を深くとり、瓜の肉に、きずのつかぬやうに取扱ひ、中に塩を詰めて、天日にほすこと二時斗り、塩水をこぼし、とくとさまして、上粕に、喰加減の塩をあはせ置き、粕壹貫匁に、大瓜二つを、あふのけにして、桶の底には、糠に塩少々まぜて、桶の大小に従ひて、厚さ三寸位にしき、中底の板に穴をあけ、水氣の下へ落つるやうにして、瓜をならべては粕をつめ、瓜とうりと、當りあはぬやうになして、ほどよき壓をかくれば、中底の糠に、水氣を吸ひとりて、瓜のつかりやう、大にはやし、又茄子は、甘塩よ塩

押して、能く壓のきゝたる時に、一日天日に干し、さまして後、右の塩かげんの粕に漬置き、かるく押をかけて、一年立ちて、又粕をとりかへ、元の如くに漬直すこと、瓜茄子共に、三年を經て程とす、

生姜味噌漬

秋の季、質入よき生姜の葉を切り、莖を少しつけて置き、土を洗ひ、生姜壹貫目に、塩五合計り、鹽押にして、水十分にあがりたる時、天氣よき日を待ちて、一日天日にはして、味噌に粕を一割まぜて、右の生姜を漬けるなり、百日にして、つかるものなり、かるき押をおくべし、

種拔蕃椒日光漬

赤たうがらしと、縮緬紫蘇の葉共に鹽押にして、一日はして、蕃椒を立にわり、種を拔き、細く切りて、紫蘇の葉をのばして卷き、少しバかり、鹽をふりて押をかけ、廿日ばかり漬けて後、水をしぼり、天日にかわかして、壺に畜ふ、

看護法提徑（三十一）

三笠舍主人

第三編　救急法

外傷、又は中毒、其外急病の興りし時、醫の來るまでに、一時の手當を爲すを、又救急法と云ふ、此法最も肝要のものにて、之に由て、病の重症に陷るを防ぎ、又死に陷るべきものをも救ふを得るなり、例之ば、傷を受けて出血甚しき時、又は或ものゝ、毒に中りし時、其救急法、則止血法、又は解毒法を心得居て、法の如くに行ふ時は、失血の爲に重症に陷るべきを防ぎ、中毒の爲に殞すべき命を救ふを得べし、其他總て準へ知るべし、

（一）　卒倒

一　卒倒とは、過劇の精神感動、（例之ば、驚愕、恐怖、悲哀等、）及精神過勞、（特に体質薄弱なる婦女の、一事に凝りしものに多し）、劇しき痛、大きなる出血、酖醉、其外内部の種々の病、癲癇、外傷、等によりて興るものにて、一時精神の機能く廢止、總ての感覺力、思考力、廢絶して、全く人事不省と爲るものを云ふ、

二　卒倒者ある時は、先づ着したる衣服の緊迫を緩くし、床上に移し、頭首を少し低くし、身体と下肢とを少し高くして、仰向に平臥せしめ、（但し顏赤きものは頭首

を少し高くすべし、）窓を開きて新らしき空氣を通じ、面部及前額を冷水にて冷し、兼て濕布にて心臟部を輕く打ち、又は摩擦すべし、又は看護者巳の口中に冷水を含みて、患者の面部、胸部、に吹きかくるも良し、或は冷水を其儘に撒灌するも可なり、又此等の法に兼て、羽毛等にて、鼻中を攪痒すれば、呼吸を吹返す事早し、

三　卒倒者の中にて、四股痙攣して面色赤く、口より泡沫を出すものは、癲癇なり、（他病の爲に興る卒倒は、此等の症状を來さず、）此症は、只靜かに安臥せしめ、頸部胸部の衣服を緩くして、自然に醒覺するを俟つを良とす、

四　沈醉して人事不省と爲るものは、吐物氣管に入るを防がん爲め、側臥せしむるを良とす、自ら酒氣の去るを俟べし、

五　人家に隔りたる所にて、卒倒者ある時は、風の透し善き樹陰に移して、前の手當を爲すべし、

六　卒倒して人事不省と爲り、前の手當を爲すも應せず、呼吸全く廢絶する時は、人工呼吸法を施して、其回復を計るべし、人工呼吸法の事は後に見ゆ、

（二）中毒

一中毒とは、毒藥を服し、若くは毒物、又は毒物の混じゐる物を食して、爲に興る病症を云ふ、通常毒物に二種あり、一を痲醉毒と云ひ、一を刺戟毒と云ふ、

二痲醉毒の大部は、植物性のものにて、其外魚毒亦之に屬す、則阿片、「モルヒネ」、「マンダラゲ」、青酸、樒、馬醉木、煙草、烏頭、數多の毒茸、火酒、河豚、等の中毒は、皆此種のもの也、其外二三の魚蝦類に、時として中毒性のものあれども、劇症を發するもの少し、

此種の毒に中る時は、次第に睡眠狀と爲り、身体四肢共に痲痺し、精神昏瞶して、鼾聲樣の呼吸を爲し、稀れには狂躁するもの有、毒強ければ昏睡して死す、

三刺戟毒は、大抵鑛物にして、硫酸、鹽酸、硝酸、苛性曹達、苛性加里、綠靑、砒石、燐、等の中毒皆此種に屬す、

誤て此等の毒物を嚥下する時は、唇、口內、咽頭に、灼くが如き痛を覺え、腹中劇しき痛を興し、惡心、嘔吐、又は吐血して、苦悶す、毒強ければ煩悶して死す、

學園

本邦女子文學略傳（第七）

目黑和三郎

和泉式部

式部は、越前守大江雅致の女にて、母は越前守保衡の女なりといへり、和泉守橘道貞の妻となりしを以て、和泉式部と呼べるなり、道貞との中らひ、いと睦しく、小式部を生みけるが、道貞はやく死去しかど、上東門院に事へ奉りぬ、（上東門院は、一條天皇の皇后彰子と申し、關白道長の御女なり、）式部和歌をよくし、赤染右衛門と名をひとしくし、當時に持囃されたり、僧性空といへるは、當時の智識にて、播磨國書寫山に居り、世の信仰淺からざりつるを、式部これに和歌を贈り、その歌拾遺集に入れり、

くらきよりくらき道にぞ入りぬべき遙にてらせ山の端の月

といへるなり、こは法華經の、從冥入冥、永不聞佛名、とある心を取れるにて、人人傳へて絶唱とせり、又ある時、式部下賀茂の社に詣でけるを、藁ぐつに足くはれて、紙をまきたりけれど、神主忠頼これを見て、

ちはやふるかみをも足にまくものか

といひかけたり、式部とりあへず、

これをぞ下の社とはいふ

とつけたりとぞ、この連歌は金葉集に入れり、天稟の機敏、この一事にて知ることを得べし、宇治物語によれば、式部は、冷泉院第四の皇子、帥の宮に深く思はれ、後には宮の妻となりし趣記せれど、如何にや、式部の自の日記にも、此宮は何事につけても、おかしくおはしましつるに、あは〱しきものにおもはせまゐらせたるが、心うく覺ゆともかき、又實に丹後守保昌に再嫁して、丹後に下りたれどなり、されど帥宮の御事は、しのびて通ひ給へる事のありしにてもありぬべし、さて、式部、保昌に從ひて丹後にありし時、保昌は、明日は山獵せんずとて、武具ども整へてありけるを、その夜、鹿の鳴く聲、しきりに聞えて、いとあはれなり、式部は之を聞きて、明日死なんとて、いたく鳴くにこそと、あはれにしをれていひけれど、保昌、さほどにあはれに思はゞ、明日の鹿獵はやめてん、そのかはり、よき歌よみ給へと戯れけり、式部はうれしく、とりあへず、

ことわりやいかでか鹿の鳴かざらん今宵ばかりの命とおもへば

と詠みければ、保昌めでゝ、獵をやめけりとなん、世に、式部の貴船明神に歌さゝげて、明神の答歌を得たりといへる歌

式部　物思へば澤のほたるもわが身よりあくがれいづる玉かとぞ見る

明神　おく山にたぎりて落つる瀧つ瀬の玉ちるばかり物なおもひそ

とあるは、式部が保昌に忘られたる比、貴船明神に詣で祈りて、御手洗に螢のとぶを見てよめりけるを、社の内にて、明神の返し給へるなりとぞ、又この感應によりて、去るしわりきといひ傳ふ、

因にいふ、式部の再醮は、當時理由ありし事なるべけれど、婦徳の圓滿を望む上よりいはゞ、欠點なしとせず、然るを、又式部に疑を存する者あり、そは式部ある時、稲荷へ詣でける途中、田中明神の西のほどにて、俄に雨に遇ひたり、すべなく、田を刈れる童の、襖といふものを借りて、詣でをへけるが、翌日式部の宿に、大きやかなる童、文もて來たり、こを參らせんといふに、式部ひらき見れば、

時雨するいなりの山のもみぢ葉はあをかりしより思ひそめてき

とあり、青かりしを、襖借りしによせて、戀の情をうちいでたるもの也、式部はこを見て、あはれがりて、奥によび入れけりとぞ、もとより、はかなきすさびにはあめれど、かゝる事にも、人の口は閉されぬものなり、此は式部の傳よまん娘達の爲にいふなり、

式部後に尼になり、誠心院に住めりと、物にあれども、卒年詳ならず、この寺は、小御堂とて、關白道長の所領なりけるを、式部に賜はりたるなりといへり、和泉式部日記は、その自記なるもの也、

日本文典（つゞき）

杉谷正隆

(三)　下一段活

下一段活とは、五十音の第四韻一段にて、語尾の變化する語を云ふ、而して是にも、上一段の如く、る、れのそはりて活くなり、例へバ、蹶と云ふ語の、け、ける、けれと活くが如し、下は上一段に對したる語なり、

下一段活は、加行、奈行、波行の三行にして、他の七行にはなし、

下一段活の圖、左の如し、

加行	蹴	け	け	ける	ける	けれ
奈行	殆	ね	ね	ねる	ねる	ねれ
波行	綜	へ	へ	へる	へる	へれ

此の下一段活の語は、右の圖にあげたる三語の外にはなし、而して此の語は、皆古のつかひ樣にて、今日は然らず、加行の蹴は、四段活の活に轉じ、けらん、けり、けり、ける、けれとして用ゐ、奈行、波行の殆、綜は、もと下二段活の、寐、經と同語なるべけれど、今は下二段活として用ゐるかた、宜しかるべし、然るに、今此處に、殊更にあげたるは、古のつかひさまを、讀者に知らせむ心さらびなり、

(四) 上二段活

上二段活とは、五十音の第二韻より、三韻まで、二段に語尾の變化する語を云ふ、而して第三韻に、る、れの乃はりて活くなり、例へば、起くと云ふ語の、おき、おく、おくる、おくれと活くが如し、上は下に對して云ふなり、

上二段活は、加行、佐行、多行、波行、麻行、夜行、良行の七行にして、他にはな

し、

上二段活の圖、左の如し、

加行	起	き	き	く	くる	くれ
佐行	掘	じ	じ	ず	ずる	ずれ
多行	落	ち	ち	つ	つる	つれ
波行	戀	ひ	ひ	ふ	ふる	ふれ
麻行	恨	み	み	む	むる	むれ
夜行	報	い	い	ゆ	ゆる	ゆれ
良行	懲	り	り	る	るる	るれ

右の圖中、佐行の、掘ずは、只一つにて、他の語の、これには活くものなし、

(五)　下二段活

下二段活とは、五十音の第四韻なり、逆に、第三韻迄、二段に、語尾の變化する語を云ふ、而して第三韻に、る、れのそはりて活くなり、例へば、受くと云ふ語の、うけ、うく、うくる、うくれと活くが如し、而して下は上に對したるなり、

下二段活は、阿行、加行、佐行、多行、奈行、波行、麻行、夜行、良行、和行、にして、五十音十行、凡てに活くなり、

下二段活の圖、左の如し、

阿行	得	え	え	う	うる	うれ
加行	受	け	け	く	くる	くれ
佐行	爲	せ	せ	す	する	すれ
多行	捨	て	て	つ	つる	つれ
奈行	寐	ね	ね	ぬ	ぬる	ぬれ
波行	與	へ	へ	ふ	ふる	ふれ
麻行	饗	め	め	む	むる	むれ
夜行	榮	え	え	ゆ	ゆる	ゆれ
良行	枯	れ	れ	る	るる	るれ
和行	植	ゑ	ゑ	う	うる	うれ

右の圖中、阿行には、得より外に活く語なし、

佐行の爲は、もと正しき此の下二段活の語なれども、後に一種の變活を生せり、されど、今は此の活きも、下の變格の、佐行變格と、兩方共に用ゐるなり、彼と照し合せて、考合すべし、

漫録

設兒後の婦人（承前）

霧の舍主人

（第四）他人に應接するに、禮を欠く事。他人に應接するは、禮に悖するのみあらず、一家の体面を保維する事も、またこの内に存するものなれば、よく心を用うべし。應接するに、禮數の度は、上中下、各その場合によりて、異なることあるべきは勿論なれども、要するに、應分の敬禮は、詞容共に盡くさゞるべからず。然るを、婦人の、設兒の前後に就きて、之を徵すれば、大に異なる所あるを見るは何ぞや。設兒前にありては、恰、處女の人に接するが如く、言詞内にこもりて、動止静雅なるを、設兒後にありては、恰、老婆の如く、言詞輕く出でゝ、喋々際涯なく、動止粗くそべたちて、雅風謹容なし。客に對して、這ひ寄る兒を抱きとり、胸かきわけて、乳房を含めて耻づる色

なく、尻居を横にし、坐足を乱して、おのれ知らざるが如きは、普く見る所なり。懇切の情至らず。謹愼の念顯れず。他人につまはじきせられて、はては、家名を汚すに至るべし。是皆、設兒の前後によりて、婦人の心がまへ、異動するによる也。愼むべしとぞいふべき。

(第五)灑掃拂拭の勤務を欠く事。　こは、侍女あまた召し使ひて、奥にこもり給へる婦人には、夢にも見給はぬ事なるべし。されど、中より以下のなりはひに、世を過し給ふ人々にとりては、灑掃拂拭は、婦人の、最も重き職掌ぞかし。都人はさらぬも、天さかる鄙にありては、この職務は、え逃れぬ事なり。朝夕に、帚木手にとりて、家の内には、四隅に塵すゑず。日毎にしぼりなれたる雑巾に、椽の面は、宛然鏡の如くなりけるものを、一朝帚とる手のたゆみ、しぼりなれたる雑巾に、水つかずなりゆきて、四隅は、塵の住家となり、椽の鏡は曇りはてゝ、足痕を印するに至るは、設兒後婦人の家に見る所なり。他人の言をまたで、兒もちては、家の掃除は、おのづから届かずなりゆくよと、自いひ出でゝ、そを通例の事とせるは、いかに甲斐なき事ならずや。兒をもちては、足手のまどひに、おのづから、怠りがちになりゆくも、自然の勢にはあれど、三人四人の兒もちたりとて、灑掃拂拭に、事欠かずつとむるこそ、婦人の本務なれ。世の中に、彼の家は、兒あるにはまして、いと清淨にしなせる事よ、といひならはせるも、この詞は、一方に、設兒後の婦人の怠りを

示せるものなり。さる事に心づかで、自、怠りを通例とせるは、返々も忌はしき事ぞ。たまく、人の訪ひ來てあらんに、木の芽煮て出ださんはよけれど、盆の上に、塵をどり、茶器の中に、垢のたゞよひてあらんは、その人の本性見えすきて、きたなしともきたなし。兒を擧げてより、兒の爲に、不淨の事、多くなりゆくといはゞ、兒童に罪きするわざにて、實に婦人のたしなみ愼みは、かかる時にある事なり。

(第六)婢僕を使ふに、驕傲になる事。　婦人の嫁りける當坐に、婢僕より、奥さまと呼ばるゝ、何となく、心はづかしく、又婢僕の名をまさめに呼ばんも、強くは言ひえぬ、これ、なべての人情ぞかし。されど、日を經、月を重ぬるにつれて、この心の薄らぎゆく、亦、これ人情ぞかし。されど、こを經過して、設兒後になりては、一際目だちて、婢僕を使ふに、荒々しくさへぞなりゆくめる。婦人の、顋もて使役し、又は咎たてゝ、うちこらす樣は、よそ目にも憎くさげなるを、婢僕の身よりては、いかに、身に染みて口惜しからん。さなきだに、婢僕は、口さがなき者にいふなるを、かげ口、ありう言には、あらぬことまじへて、怨じつべし。婢僕を召し使はんは、男子とても、いと六ケ敷を、婦人にありては、ほこりがに取りなし、わらたてゝ懲らさんなど、露むかりも、あるまじき事なり。吾が身の敵となるのみかは、家の爲にも惡しかりなん。何事にもさし出で、主婦の權力を示さんは、中々に惡しき事なり。こは、

設兒前、よめいりたらん時の心にたちかへりて、恥しげに召し使はんぞ、これにまさりたる方なかるべき。さる心がまへの内に、取りしまりたる心だにあらば、やさしとて、婢僕にあなづらるゝ事は、塵ばかりもあるべしやは。女子のくせにと、婢僕にかげ口たゝかしむるこそ、侮らるゝ始めなるべけれ。

（以下次出）

古代の女德（一）

藍郁生

おのれ、此頃小閑を得たりしまゝに、かねて好める萬葉集をひもとけり、そも此歌集は、人も知れるが如く、當時代、人の實際に遭遇せし事實をぞ、最も率直にして、しかも雅美なる言詞と、且最も高尚にして、溢るゝばかりの感情とを以て、詠出せしものなれば、集中所載の詠歌、一として、後世人の詠作せしものゝ如く、心にもなき空事を、浮華輕詞を並べて、物せし類にはあらず、されば、此集一方に於ては、國史の補闕をなし、且古代風俗史とも貴ばれつべく、國史國文家の寶典とも仰がるゝなり、こゝを以て、おのれ、集中女流の纖手になれる、二三の歌を、漸次揭げ、以て當時女德の一班を推測せむと欲するも、强ち附會の枉つ事にもあらざるべし、あはれ明治の姫君達、これを讀みて、その德操の摸範ともなされなば、幸多き事にこそ、

ますらをが征矢たばさみ立向かひ
射る的かたは見るにさやけし

題して曰く、舍人娘從駕作歌と、盖こゝに駕といふは、持統天皇の御されし駕ならん、こは、そも、身分卑しき舍人の娘のことにしあれど、其名も傳も、共になけれど、纖弱なる一女子の身ながらも、猛き大丈夫共が、互に射放つ矢の行くさまの、如何にも雄壯なりけるを見、感激の余滴、遂に此の詠となれる、この娘の心ざまこそ床しけれ、獨其心さまの優しく、また床しきのみならで、この歌も、いみじき名詠にして、「いるまとかたは」の下に、「みるにさやけし」と置きて結ばれしは、妙手といふべし、そは誰れにても、歌よむ人の、よく知る處ならん、今この歌によりて、推測を下さんに、古代の女子たる、決して優柔不斷、難事に挫け、苦業に其志を枉げ、只管、怯弱これわが本性と心得る如き、腐敗婦女のなかりしを知ることを得べし、彼の舒明天皇の皇女なる、中皇女が、間人連老に奉らしめられたる詠の如きも、頗る此趣あり、されバこそ、天照皇太神の、御裝を男になされし如き、或は神功皇后の、壯擧ありし如き、或は橘姫の、大海に沈まれし如き御事蹟もあるならめ、

それ、女子の本性は、もと優美温柔にして、順從なるにありと雖、決して卑屈怯弱なるにあらざるべし、されバ、其巨帶の裡、常に一ふりの利劍を藏して、わが身を護る用意あるべし、古來武家時代の女子、みな此の風ありき、柔かなるうちにも、强硬決して侵すべからざる元氣なくバ、彼の娼婦と、何の異なる處かある、彼の楊柳を見よ、柔か

なれ共、未だ嵐に折れず、記臆せよ、姫君達、

　わが大君ものなおもはしすめ神の

　　つきて玉へるわれなけなくに

御名部皇女奉レ和二御歌一と題せり、この皇女は、元明天皇の御姉なりしとか、つら〳〵、御歌の意を按ずるに、吾が大君よ、このわれが世にあるからには、何も叡慮を勞し給ふな、若一旦天下に事あらんか、其時は、水火の難も辭する處なく、私は陛下の御爲に、此身を捧げ申すべし、決して叡慮を過度に勞さるゝなかれとて、日夜國家の爲に、配慮にひまなき天皇陛下を御慰め申し、且已が決心をも表せられたる御歌なり、これ元明天皇は、女帝にませど、凡て國事の爲に、小心翼々として、震襟を煩はし玉ひしならん、されば、御姉の皇女、御友愛の情の切なるより、これを詠じ、且奉り、以て皇妹の御辛勞を慰められしならん、其御志の程こそ、かしこくも床しけれ、さはいへ、皇姉は、只、わが私情をのみに驅られて、天下の公理を顧みざるにあらず、即ち「すめかみのつきてたまへる」とて、此御位は、皇神の詔のまに〳〵、繼承すべき神聖なる天位にして、陛下も、其統に依り、臨ませられるものなりといふことを叙べて、天位の尊重を説かれ、また御名部皇女を、元明天皇の皇姉とある上には、いふまでもなく、天皇は、其皇妹なるべし、其妹をさしてだに、「わが大君」と稱し奉り、おのれ、臣下の地位にたゝれしは、名分に明かなる御事といふべし、あはれ、姉は、わが妹の穎才を妬み、妹は、

姉の失徳を罵る如き姫君達もあらバ、警めて可なり、謹みて可なり、

小野小町の考（承前）

故本居内遠翁

俗にいふ、小町が雨乞の歌とて、ことわりやひのもとなればてりもせめさりとてはまたあめが下とは、此歌、てにをはのとゝのへをもしらざる、後世の、つたなきものゝ作にて、その世のふりにあらず、まことの雨乞の歌は、小町集に、日のてり侍りけるに、雨乞のわか、よむべきせんじありて、「ちはやぶる神もみまさぞ立さわぎ天の戸川のひぐちあけたまへ、と見えたり、こは、早く人もしりたることなれども、初心の人のために、かきつく、又謡曲に、卒都婆小町とて、かの老さらばひてのち、古きそとばに、腰かけたるを、僧のとがめて、勿體なし、いかでといふに、こたへてよめる、「極樂の内ならばこそあしからめそとは何かはくるしかるべき、此うたも、小町の比の歌のしらべも、みやび詞をも、しらざる後世の作なり、謡曲は、足利義政公の比より、漸々につくりたるなれど、その比以來の作あるべし、内に對して、そとゝいふは、後世のことなり、古くは内外といひて、そとゝいふ語はなき事なり、そともといふ語は、そがひ、そびら、などのそと同じく、背といふとかよひて うしろ、しりへのかたをこそいふなれ、内にむかへて外をいふ語にはあらず、背つ面の、つゞまりたる語なるを、後世誤りて、もと

いふを畧し、意をもあやまりて、用ふるやうになりたるを、さる事もしらで、かくよめるにて、つたなさしられたり、又老て、かたゐの如くなれるも、玉造小町にこそあれ、小野小町にはあらず、關寺小町といふ謠曲も、これに同じ、さうし洗小町といふも、根もなきことなり、禁裏歌合に、小町、まかなくにの歌をよみて出せるを、太友黒主、是は萬葉集の古歌なりといふによりて、取よせ見て、墨色あらたに書いれたるなりとて、あらひたりしかど、その歌のみ、あらひ流れたりなどいふ、奇怪の虚譚なり、いづこの人か、書卷を、水にて洗ふもの有べき、かつ墨色あたらしきは、あらひて落つといふ事やはある、すべて無稽の事なる上に、黒主は、歌よみにてあれども、禁中昇殿などすべきほどの人にはあらず、天台座主記一卷に、貞觀八年五月十四日の解文に、近江國滋賀郡大領從八位上大友村主黒主、と出たる外に、位階見えず、いと卑き人なるをもしらず、六歌仙とて、皆ひとしなみに心得誤り、畫などにも、黒主を、衣冠黒袍などにかくは、すべて、さる卑官ともしらざるなり、作者部類に、六位の部に出せれども、こは、すべて、六位以下の人を、わかたずして出せる例なれバ、論なし、此外、淸水小町などいひて、死後、かたちをあらはしたりなどいふ類、又謠曲に、高安小町、山本小町、夢見小町、雲林院小町、市原小町、富士見小町など、くさぐさいへれど、皆田樂法師以下の戯文なれバ、論ずるに足らず、此謠曲の中に、通小町といふは、

世にもいひはやして、人のよくしれる事なれども、正しき書などには見えず、されど、附會はとまれ、ひたすらの根なし事とも見えざるによりて、今此一條を、わきまへあかさんとす、

世にいふ所、小野小町を戀したふ人多き中に、深草少將といふが、ことに心ざし深く有けるを、猶なびかずてあるが、心ざしの深きによりて、さらば、今より百夜の數を、一夜をもおとさずてかよひて、しるしをのこしたまへ、さらば、その心の、まことに深きほどをも知りて、したがはむ、といひけるより、雨ふり風ふき、雪うちちる夜をもいとはずして、かよひたりといへるまでは、口碑にいふ所も、通小町の謠、小町物語などいふ、そらごとせる後世ぶみも、同じごと聞ゆるを、この後のさま、或は九十九夜にして、あはずして、少將は死にたりともいふは、關寺小町の謠などにもいへり、小町物語には、百夜にわたる夜、事ありて、やむことを得ず、得ゆかざりしが、小町は、こよひこそ、ちぎりの如く、百夜にみちたれば、あひもせめと思ふに、いかなるにか、來ざりしかば、人の心のたのみがたき事と、なげきもし、いぶかりもしたりといふさまなり、此小町物語の事は、猶次にいふべし　（つゞく）

正誤　前號に、衣通姫を、そとほりひめとよめるは、そとほしひめの誤

呼小鳥

あ、な

此鳥の事、代匠記、万葉考、餘材抄、打聽などはさらにもいはず、中山美石が御撰集新抄、橘守部が山彥冊子などに、くはしくいへるを考合すべ

し、年々随筆にもいへることありき、こゝにれ、例の、ものに見えたるかぎりを出して、見あはせとなしつ、万葉一、「倭には鳴てかくらむ呼子鳥象の中山よびぞこゆなる、同八、「神なびのいはせのもりのよぶこ鳥いたくな鳴そわがこひまさる、同、「世のつねにきけむくるしき呼子鳥聲なつかしき時にはなりぬ、同、「瀧の上のみふねの山ゆあきつべに來鳴わたるはたれよぶこどり、同十、「わがせこをなこせの山のよぶこ鳥君よびかへせよのふけぬとに、同、「春日なる羽がひの山ゆさほのうちへ鳴ゆくなるはたれよぶこ鳥、同、「こたへぬになよびとよめそ呼子鳥さほの山べをのぼりくだりに、同、「朝霧にしぬゝにぬれて呼子鳥三船山ゆなきわたる見ゆ、同、「朝霞八重山こえてよぶこどりなくやながく

るやどもあらなくに、古今、「をちこちのたつきもしらぬ山中におぼつかなくもよぶこどりかな、後撰、よぶことりをきゝて、となりの家におくり侍りける、「我やどの花になきそよぶこどりよぶかひありて君もこなくに、同、「ながめつゝ人まつよひのよぶこどりいづかたへとか行かへるらむ、同、「うたのゝは耳なし山かよぶこどりよぶこゑにさへこたへざるらむ、同、「耳なしの山ならずともよぶこどり何かはきかむ時ならぬ音は、六帖、「みなづきのなごしの山のよぶこどりおはぬさにのみ聲の聞ゆる、同、貫之集、「いつしかもこえんとおもふあし引の山になくなるよぶこどりかも、貫之集「いとすゝきよぶこどりにもあらねどもむかしこひしき音をのみぞ鳴、「色うすくちりぬる花の陰に

來てたれよぶこ鳥わさなく〳〵なく、後拾遺、法輪に道命法師の侍けるとぶらひに、まかりわたるに、よぶこ鳥のなき侍りければ、法圓法師、「われひとりきくものならばよぶこどりふた聲まではなかせざらまし、金葉、よぶこどりをよめる、前齋院尾張「いとか山くる人もなき夕ぐれに心ぼそくもよぶどりかな、詞花、「こぬ人をまちかね山のよぶこどりおなじ心にあはれとぞきく、千載、「おもふこと千枝にやしげきよぶこどりしのだのもりの方になく也、玉葉、「わたらよのあはれをしるやよぶこどり月と花との有明の空、風雅、「人もなきみやまのおくのよぶこ鳥いく聲なかばたれかこたへむ、同、「おもひたつ道のしるべかよぶこどりふかき山べに人さそふなり、新拾遺、「春山の霞のおくのよぶこどり世のかくれがにたれさそふらん、新續古今、「卷向の檜原の山のよぶこどり花のよすがに聞く人ぞなき、堀百、「もとつ人わかでかへりぬ呼子鳥なほよびかへせなが名たのまむ、同、「立かへるみちもはるけしよぶこどり事ありがほに人なとがめそ、巳下集なかゝねは、みな堀百なり、「つれ〳〵の春のゆふぐれながめやるをりにしもなくよぶこどりかな、「さよ中に耳なし山のよぶこどりこたふる人もわらじとぞおもふ、「こたへする人なき山のよぶこどりひとりなきてや春を過らん、「つねよりもをはつせ山のよぶこ鳥聲むつまじく聞ゆなるかな、「東路のなこその關のよぶこどり何につくべきわが身なるらん、「人かげもせぬものゆゑによぶこどり何とかゞみの山になくらん、「なくたびにたちしとまれば春山

のみちさまたげのよぶこどりかな、「おぼつかなたれよぶこどりなくならむこたふる人もなき山中に、「さよふけていはせのもりのよぶこどり山ひこのみぞこたふべらなる、「こたへぬに何とよすがらよぶこどり聲たえもせずなくにかわるらむ、「まだしらぬ道ふみまよふ山里に呼子鳥こそしるべなりけれ、「鳴とてもたれかはとまるよぶこどりいざやかひなき名にしもあるかな、夫木、「よをのこすねざめにたれをよぶこどり人もこたへぬしのゝめの空、「あしふきのこやてふかたにやどからん人よぶこどり聲もひまなし、「あしびきの山のやまひこたへずむ友よぶこどりたれとなかまし、紅葉に鳥のやどりたるを、恵慶法師、「もみぢ見てかへらむかたもおぼえぬをよぶこどりさへなく山路かな、

巳上四首夫木月詣「おぼつかなたれをかくのみよぶこどり人かずならバこたへしてまし、同、「山ひこをなれが友とやおもふらむこたふれど又よぶこどりかな、新六、「人はこでよや更ぬらんよぶこどりよべどこたへず耳なしの山、伊勢大輔集、物おもひみだれたるに、よぶこどりのなくを、「世中をなぞやといふもよぶこどりわがなく聲をこたふとやきく、曾丹集、「我身をバみな人すべてすさめぬをあはれにもはたよぶこどりかな、二條天皇太后宮大貳集、「われをしもよぶこどりにはあらねども聲する方に心をぞやる、賀茂保憲女集、「花のえにはね打かはしよぶこどりなけども春はとまらざりけり　小馬命婦集、「よぶこどりいく聲なきぬ山ひこのこたふぞかりはあらずぞ有ける、拾遺愚草、「くもるよ

の月の影のみほのかにて行方しらぬ呼子鳥哉、拾玉「よぶこどりうれしくもあるかをちこちのたつきもまよふ山のゆふぐれ」「ながめする心をしるかよぶこどりおのがすみかの山はいづくぞ」「呼子鳥きゝわくこともなけれどもながめにとまるゆふぐれの空」「山里のながめにくるゝ夕ぐれに聲あはれなるよぶこ鳥かな」「契りおく人とやこれをよぶこどりおぼえぬものをたそがれの空」「花ざかりかへる雁をやよぶこどりおぼろ月夜に聲あはすなり」、和名抄云、萬葉集云、喚子鳥、其讀、與不古止里、徒然草云、喚子鳥は、春の物なり云々』などあり、右の歌どもの中に、春よよみたる多く、又たまくは、秋にも、又おぼろ月夜にも、よみあはせたり、されど、おほかたは、季のよみあはせなき歌どもになむ有ける、

手紙の反古　稲園子

ひだりに記せるは、江川英龍といへりし儒者の、人の女の嫁ぐをり、書きて送りし誡の文なり。今讀み見るに、たゞに一人の誡のみに止まらず、當に萬人の誡とするに足るべきものなり。されど、また例の通り、こゝに。

夫を天と致し候事は、誰も辨へ居候へバ、天を怨み、天を厭ひ候迚、逃可申様無之候、是等の義に、心を附、能々相事へ可申候、凡門内の治は、恩義を掩候故、心易立も出來し候間、敬愼専一、心掛け可申事、

一男は剛を以て德と致し、女は柔を以て道と致し

候事に候間、身を修め候には、敬にしくはなく、つよきを避候には、順にしくはなき事に候、故に敬順の道は、婦人の大禮に候、偖て誰も、最初嫁候節は、何様にも、厚く心掛く可き積の處、追々居馴候にしたがひ、前にも申候、心易立と云者出來候間、朝夕に心を用ひ、聊にても差出ヶ間敷事、或は不足ヶ間敷事共、決して有之間敷候、總じて足ることを知り、勘忍を専一とし、言行とも、都てひかへめ〳〵に致し可申、凡事に直なると、曲れるとは、あるなれども、それを其儘に、是れは直なり、是にては曲れるなり抔と申時は、自然に聲高にもなり、果は夫婦争ひにも至り申候、畢竟は、平日前條の次第を等閑りて、心に掛けざるよりの事に候、柔順婉曲にして、夫に從ふは、女の道と申事を心得可申事、

一夫留守の節、客來ること有之ば、夫不在の旨申斷るべく、若し無據事にて、座敷へ通し候はゞ、誰にても側に差置、差向にて話不致様、精々心付可申候、凡物は、腐候より蛆を生じ、人も疑れず候得ば、讒も入り不申候、能々心得可申事、

一僅かなる功に誇り候は、敎なき婦人の常にて、其心の底も見られ、恥しきことに候、よき取計の儀有之候とも自負の體なく、或は不行届、不調法抔と被申候節は、我身を顧み、聊か不平に存じ申間敷候、それを口數多く、彼是辨じ候へば、非を飾り候にあたり、却て他の厭惡を來し

候事に至り可ㇾ申候、
一衣服其外、都て手掛候者へは、念入可ㇾ申事、
右は此度縁付候に付ては、最初よりの心得方、大切に候間、差遣すものなり、
一下婢共告口等、一切取用申間敷、己れの長を説き、人の惡しきことをあげ候樣なる物語は、決して致し申間敷候事、
一其家政の儀、他家幷に里方の振合を例に引き、彼是申間敷、且つ自分の申出候通にならざる迚、不快の顔付、又はプリ〳〵致候事共、甚敷夫の氣色に障り候ものに付、都ての事に、此心付肝要と、心得可ㇾ申候、且夫に對し候て、一旦さからひ候共、終には致しかたなく、先の意に從候者故、寧ろ最初より、順從致し候方、女の道にもかなひ、われにも由なき恚恨の念慮を起さず兩全の道と心得可ㇾ申事、

こぼれ梅

其八

渡部乙羽

時機は再び獲べからず、傳へ聞く吉良上野介は數年來の警備に倦みて、今は殆んど我に敵あるを思はず、色に耽り酒に浮かれて、露ほども武邊に心を置かぬのみか、四

季折々の物見遊山に、分外の華美を盡くして、小袖幕の中には美人の粹を萃め、驪山宮の俤を移して、肉漿の山に白魚の波を湛へ、宛らの酒池肉林を見るやうなれバ、亡國の兆は眼前に迫りたり、此時に討たずして、また何の時にか討つべきやと、堀部彌兵衛を始めとして、一味の面々心を協せ、聲を揃へて申しけれど、大石内藏助も今は默止難しとて、竊に山州山階の家を遁れ、暫時踪跡を晦まして、人知れず江戸へ下り、討入の夜の方略などに、思慮を凝らして居たりけり。

十二月十四日は朝來の凍雲空に凝りて、一天布もて覆ふが如し。高輪泉岳寺は丘に據りて建てたる精舍にして、門前には渺茫たる滄瀛を湛へ、漁舟波に隱れて白鷗汀に飛ぶの景色を貪り、境内には老松古松森々として、風常に颯々たり。春は御殿山の夕暮に、花を散らす鐘を搗きて、遊人に夕殘の句を吐かせ、秋は袖ケ浦の月に、看經の聲を送りて、見る人の胸を爽かにすめり。されども冬枯れの朝、野分の夕、驛鈴の音遠く微に聞えて、物淋しさもまた一入なり。

赤穗の城主淺野内匠頭の墓前は、流石に荒れしといふにはあらねど、一家中離散の後は、構へて手入を怠り勝になしければ、荊草間々、塚の邊に茂りて、霜夜の月を弄

び、杉の木立の陰をなして、晝と雖どもなほ暗かり。況てや此頃の寒空に霜重しくて、墓石も凍り崩れなんとする中とて、香花絶えて人の訪ふ者なく、卵塔の傍には、霜柱の踏めむ氷を碎く音わり。

斯かる處へ何人とも知らぬ旅打扮の男三人、彼方此方の石塔の間を拔けて來りつ、齊しく内匠頭の墓の邊に立止まり、後を顧み前程を眺め、見る人無きやを確めたる上、三人顔を見合せて、莞爾と笑みを傾けたり、中なる老人聲を潜め。大石殿矢間殿見る人が無くて仕合であつた、各々少しも早く亡君の墓前に御回向申さうでは御座らぬか、我々本國を立離れてからは、態と墓參の足を遠ざけ、墓前を荒れに荒らした る今迄の不忠は、今日ぞお詫びを致しませう、わア〳〵老の身の、亡君の墓を見るにつけても、先立ものは涙ぞかり、愚痴と笑つて下さるなと、合羽の袖に眼を拭ひ、愁然として差扣ふれぞ、内藏助もうち凋れ。まこと原殿の云はるゝ通り、四十七騎の同士ありとはいふもの、、敵に内意を悟られては、一大事と思ふがゆゑに、心ならずも墓參も致さず、荒れたる塚を見るにつけ、亡君が御無念の程思ひ遣らるゝ、ええ、已れ憎くき吉良上野、多年の辛苦、今宵ぞ思ひ知らして遣るぞ、地下に在ます





我等が先君、吉良の屋敷へ照臨まし〳〵て、孰れもが手練の程、枉げて御覧じたび給へ、今日の今まで家中の諸士が、不甲斐なさを見給ひては、嘸ぞ切歯くや思しけん、復讐延引いたしたる不忠の罪は、明朝一同墓參の上、幾重にも御詫び仕るべしと、涙を流し聲を上げ、拳を握りて震ひ泣く、十次郎も涙ながらに、閼伽桶の水を墓前に供へ、合掌禮拜したりけり。

時刻を遷して人目に立たむ一大事と、宗右衛門が云ふをそれぞと、各々別れ〳〵となり、家に歸りて日の暮るゝをぞ待詫びぬ。

冬の日の暮れやすく、はや黄昏となりけるに、朝より催したる凍雲、漸う暖氣を含みて、誰彼れ別かぬ頃より、一天霏々たる雪とはなれり、大石内藏助は討入の準備全く整ひたれバ、今や矢間十次郎が來たるかと、隱れ家の庭前を眺めやりて、松が枝の白うなるを、心地快氣に賞めぬ。

内藏助は色青白き方にて、脊丈は中人よりは小し。柔和温順にして常に言語少く、莞爾と愛嬌多き人なるに、今宵は復讐の夜の事なれバ、滿身の勇氣、滿面の喜色、溢るゝばかりなりけれど、威風凜然と四邊を拂へり。

文林

降る雪を合羽に凌ぎて、息急き駈け來るは矢間十次郎なり。冠れる笠を門口に捨て、出口の椽に腰うち掛くれど、内藏助は辞をかけ。屋敷の様子は如何なりやと問ふ。首尾は上首尾、今宵は雪見の宴ありとて、來客も數多あれど、出入の人に立交りて、屋敷へ忍び入るべしとの愚妻が知らせ、天の與へ賜へる時機、はや〳〵屋敷へ忍び込まんと、勇んで云ふを内藏助は制し止め。否々、急ては事を仕損ずる、計略は密なるをよしと聞く、さらば此趣を原宗右衛門殿へ知らし遣らんと、立上る袖を抑へ。その御手配は御無用なり、拙者此方へ來る途にて、宗右衛門殿に逢ひたれバ、始終の様子を打合せ、折好き場合に合圖をせんと約したり、御案じあるな、サア〳〵早く屋敷へ忍び入らんにと、鵞毛に似たる雪掻き分け、鶴氅とも見る合羽の袖を掃ひもせず、吉良の屋敷へ急ぎ行きぬ。

避暑　有栖川宮董子御方

蟬のこゑきこゆながらに涼しきは
ひかげもりこぬ森のしたかげ

華頂宮郁子御方

死ぬばかりくるしといひし暑をも
わすれて涼むまつのしたかげ

近衛　忠煕

わけ入りてなつをわすれん箱根山
先やまくちもすゞしかりけり

徳大寺實則

箱根山いで湯のやどにみなつきの
てる日もしらですぐしつる哉

佐々木高行

山水のわさきながれもたちよりて
むすべは夏をわすれけるかな

鍋島　直大

いで湯にもゆく道暑しこゝながら
夏にしられぬやどやもとめん

前田　利嗣

夏の日をこゝに過ごさん山かげの
いはもる水を手にむすびつゝ

長岡　護美

隅田川つきにすゝみてこぐふねは
ひとはの秋にさきたちにけり

高崎　正風

すゞみにといづれば暑しわが宿の
大木のかげにこの日くらさん

前田　利鬯

我がものと思ふ岡べのまつかげに
とくきてすゞむ人もありけり

植松　有經

うちつけに涼しくもあるか夏山の
岩にくだくるたきのしらたま

谷　勤

大木なきわが宿ながらなつの日を
わするゝほどの陰はありけり

松下泉　岡部　譲

わだかまる龍をいづみの底にみて
凄くすゞしきまつのしたかげ

在原業平　光岡　正彰

うめのはな匂ふこずゑにもる月の
影だにさむきはるの夜のころ

鷺　三浦　千春

魚ねらふさぎぞ洲崎にたてりける
つりする吾をながし目にみて

民直果安の妻四比信紗　佐々　豊水

おのがはら他の腹をもへだてなき
心のかゞみひかりさやけし

頼山陽　草野　隆道

久かたの雲とやまとにくらべても
たかさは君がいさをなりけり

夏山　千日　亮

氷室山こぞのあらしやのこるらん
ことしの夏のさむくもある哉

心　遠山　操

朝な〳〵向ふかゞみのくもりなき

こゝろを常のこゝろともがな

鍋島　榮子

避暑

日ざかりもけふは忘れてすぐす哉
この山さとはなつなかるらん

前田　朗子

日さかりはこゝにすぐさん我宿の
おほ木のかげは秋もかよへり

税所　敦子

河上のたゝすのもりのしめの内は
ひるもあつさを許さゞりけり

下田　歌子

往復もたやすくなりぬかうづけの
いかほの出湯いざゆあみてむ

伊東ちせ子

何事をなすともなしにまつかげの
しみづの元にけふもくらしぬ

伊藤　生子

風ふかぬゆふべにきても涼しきは
たなかの森のこかげなりけり

田邊きみ子

水のおとの遠くきこゆる山かげは
なつもへだてしところなり鳧

田邊たつ子

箱根山ふたとせみとせきてみれど
この夏ばかりすゞしきはなし

中澤のぶ子

足引のやまべすゞしきたきの音に
みやこの夏をわすれけるかな

小池　道子

玉くしげふたらの山はかぜさむし
などて冬ごろももてこざりけん

中島　歌子

はこね山夏をのがれにゆくたびは
思ひたつよりすゞしかりけり

鶴　久子

こゝにして一日くらさん隅田がは
風ふきとほすきしのたかどの

夏曉月　諏訪　晴子

遠山のたかねしらみてなつかはに
つきこそ殘れ夜はわけぬらし

夏夕風　尾崎すゞ子

少女子がはたるまつとや高どのゝ
はしゐのすだれ風にまかせて

照射　安東　菊子

夏山のまつの火ぐしはさをしかを
やみよりやみに誘ふなりけり

三沼川に螢をみけるをり　河野　文子

照るつきは雲にかくれて三沼がは
はたるながるゝかげの涼しさ

河夏月　眞崎　淑子

かは風のふくも涼しきなみの上に
砕けてうかぶよはのつきかげ

小杉　浪子

すゞしさもひとしほまして隅田川
澄みわたりゆく夏の夜のつき

蠶

久米幹文

さくら花さかゆる妹が
怪しくも人に似たるか
外さまにはひも渡らず
他物まはるともせず
諸共におきみやすみゝ
むくつけき心はもたず
已とまゆこもりつゝ
うま人の大御けしがね
生の子は彌つぎ／＼に
功なり名さへも遂げぬ
人世によくも似てけり
國もせに夏かたまけて
伏屋たてかふと云こは
えびらをむ宿と定めて
にひ桑の葉のみ求めて
あまたの友をむつびて
淸らなることを好みて
かは衣四度ぬぎかへて
千尋のはき出づる糸は
こてふの夢かはすまに
あめ地のめぐみ報いて
げにもげに怪しの虫よ
うべしこそ少女の友が
かひはこるなれ

反歌

をとめ子が新桑まゆのいとはへて
千よろづ國もひかむとすらむ

船路の記（つゞき）

故人　藪　氏

むかしは、海の中に鳥居ありて、いとゞ、たぐひなかりしとなむ。今は、竹にしめはねてたちぬ、舟をとゞめてあがれむ、日も西にかたぶく。いそぎまうでむとす。岩がきしめし、磯のかたをあゆみて、陰たかき松の老木の、並みたつ下を行く漸宮居近く成りぬ。いざなふ人／＼の、後れしも來りつどひて、いざまうでむとて、水をむすび、くちそゝぎ、手あらひきよめて、廊を行く。ひだりのかたに、宮人とおぼしくて並居ぬ。神のみあ

らか、光添ひて、かう〴〵しく、まろうどの宮とかや、申奉るとなん。先ぬかつきて、廊をめぐる。右に左にかよひ行き、さるかたぞなき。宮居は、みつ潮のさし入りて、日に〳〵あらたにそゝぐ。舟人もひきいれて、所〳〵にあり。鳥居のかた見わたすに、海の面、まん〳〵として、日月をうかべ、まひどの、をがみどの、神のみあらか、いふばかりなし。今まで、ぬかつきし宮〳〵の、みあらかとは、ことかはりて、めづらしき御ましのさま也。東西南北のゆきゝ、あるは、そりはし、あるは、たゞちに板を打ちたる、あるは、石だゝみの、わざとなくして、そともの道にうつる。入りては、出づる道をたどり、來りては、かへることをわする。かねの燈籠、かけつゞけて、夜もた

と〳〵しからず。美麗かぎりなし。廊には、みな、おばしまあり。まひどのゝさきに、おばしまなき所、たゞ一ところあり。爰にて、月をも見、よもすがら、ねんずをもせば、心もすみわたるべしとは思へど、いそがはしければ、むなしく出でゝ、ひだりのかたに、千疊敷といふ所あり。端山のいたゞきなり。のぼりてみれど、五重の塔あり。千疊敷の臺あり。たゞ大きなる計りにて、外に見どころなし。海つらも見えぬれど、おもふ程の景色もなし。それより、又いたゞきに口のなき堂あり。あけにぬりて、めぐりに玉がきあり。いかなる堂にやあらむ。をがみ奉らむもよしなし。くだり行く道は、芝生みどりなり。友どちは、いこひて、とゞまりゐぬれば、ひとり下りて行くさきに、あ

けの鳥居、たちたる宮あり。いかなる神ぞととへど、えびすにてぞおはします。手洗水は、かけひより來りてたえず。こゝろ涼しく、みな人も、ぬかつくめり。次第〳〵に、宮居のそともめぐり、爰にかしこに、神々、ほとけの、堂、やしろは、かぞふるに、いとまなし。をがみ〳〵て、海邊の方に出でぬれど、並木の松、はら〳〵とつゞきて、石の燈籠、數志らず、ならびたてり。行くこと遠くして盡きぬ。其さきに、大きさ、いちだるき石の燈籠、ひとつたてり。右は海、左はみつ潮のゆききありて、うちにめぐれる岩がきあり。舟も、うちの干かたにつなぎぬ。弓張月の影きよく、浦風すゞしく吹きて、暮ふかくかへる。又廊にのぼり、神の御前に行きぬ。ともなひしめのわらはの、三絃を好みて、京にあるうちは、專らならひて、たふとき所にも、面白き所にもゆかで、心を盡くすことの、いとをしく覺えぬれば、せめて、いつく島姫に、奏し奉らせむやと心づきて、宮人に、みつの緒の志らべ、奏し奉らせむに、とがあらじや、いなやととへど、かたきことにこそといへど、歸るに、今志ばしと、とゞめぬれど、とゞまりぬ。まち玉へ、とひて今來むと行きしを、まちわたれど、かへり來て、奏し玉へとゆるせば、はいのままにこそと、やがて、やすらひし、かりのやどりにかへりて、月の入らぬほどにと、いそぎて、ともなひまうでぬ。御燈の光明くかゝげて、けしき、ことにうや〳〵しく、宮人なみゐぬ。あらたに座をまうけぬれば、居直りて、つゝしみ、ぬかつき

奉り、六段のしらべ、雪月花みだれを奏し奉る。これも、いなかうどのわざには、あまれりや、たらずや、聞人多く、あつまりゐぬれど、はぢたるけはひもなく、おいらかに、さう歌して、彈きをはれどかへる。ぐしたる人〳〵も、嬉しと思ふかは也。まして、おやなる人はとぞ思ふ。夜ふくるまで起居ていぬ。丑みつばかりに、さわがしく、人音すれど、おどろき起きてみれば、火あり燃えたつ。ほのほ甚しく、いづらとゝへど、しる人なし。しどしみぬれど、やがてふしぬ。

九日、明より、舟々出でぬれば、此ふねも出でむとて、まづ陸のりたにあがりて、舟よそはひのいとまあれど、我は嬉しとおもひて、よべ見殘したる、すさきの方に行く。みちにて聞けば、火ありし所は、はつか市となむ。きのふ見しに、よくにぎはへる所がらなりしが、一夜のうちに、みな、やけやしつらむかし。次第にあゆみ行きて、爰かしこ、見ばやとおもへど、我のみ、出ふねのさはりとならばの心、おちゐねど、たちもどりて、舟にのる。やがて、おし出でたり。明神の前を漕行く。むかひは、よべみし石燈籠の、盡きせず立ちつらなり、松も立ちならびて、嶋のさま、みるめいやまされり。ともなふ人々の、みよや此景、たぐひまれなりといふに、心うつして、めもはなたでみる。うつりかはるしまつゞき、いづれを、いづれとかわかむ。奇なる石、奇なる岩は、おのがまゝに立ちならぶは、みるにも、いふにも、たとへむかたなし。おんどのせとより、宮島のせ

と、こすまでのうちは、江のやうにみえて、ことさらに、風も、おもむろに吹けど、さゞ波たちぬ。とこ潮なれど、磯ぎはも、ひかたなくて、いとよし。白きすはまおほく、長くながれて、みるめ清し。あなたかなた、磯屋もあり。すはうの國、くばおかた、右の方に見る。朝のうちは、薄霧立ちて、山々のかたは、ほのかなりき。なぎになりて、舟はおして行く。はかどらず。漸四里計り、きぬるといふに、俄にくもり、雷とゞろき、雨ふれど、雨よそほひして、とまふきわたし、何くれと、舟うち靜ならず。沖中に、かゝりゐぬれば、風吹き、なみたちて、乘りたる人々、やすからぬけはひのみゆれば、舟長は、沖こそよかんなれ。いでゝ、素人の心やすめむとて、陸ちかくよせんと、おして、かうしろといふ所のみなとにかゝりぬ。くれ行けば、所のさまもみえず。いざり火か、すくもたく火かと、おもふばかり、火ぞみえぬる。蚊おほからむとて、少し沖の方にとまりぬ。夜更くるにしたがひて、いなびかりもをさまり、風もしづまりぬ。

雜報

●避暑のすさび　こぞし、敎の庭よりいでゝ、此の程の暑さを避けむとしては、或は、風すゞしく、

水清からむ山里をたづね、或は、波の音高く、松風きよき海邊にたどりて、温泉に浴み、海水をかづきなど、そのわざ、種々ありぬべし。されど、これは、金おほくもたる人の上にて、おしなべての人の、かならず行ひ得らるゝ事にもあらじ。又、かく、山里を尋ね、海邊をたどり、温泉に浴み、海水をかづかむにも、菅の根のいとも長かる夏の日には、猶、身のいとま多かりなむ。このいとまには、何事をかすべき。常の科業の復習のみにては心倦みなむ。むつかしき文の講說聽かむも物憂かりなむ。さては、心を樂ますべきものを撰むでこそ、中々に善けれ。かるた、花あはせ、新聞、小說なども、暇ある身の、つれ〴〵なぐさめむには、こよなきすさびとすゝめれど、あしうはあらざるべし。されど、女等には、これにまして、ことに適當しきことこそあなれ。これは、山里を尋ね、海邊にたどらずとも、誰しの人にも、思ふがまゝに行ひ得らるゝ樂みなりけり。つぎ〴〵に書きいづべし。まづは、

●文の林　にあさるといふこと。文といへバ、種種ありぬべけれど、こゝにいへるは、女等が常の科業に用ゐ給へる中の、こち〳〵しき理論めきたるもの、あるは、味も色香もなき規則めきたものにあらず。又、詞いやしく、心たはけたる小說草双子をいふにもあらず。理論と規則とは面白からじ。いやしくたはけし小說草双子は面白かれども、身を修むるに害あり。さては、おもしろくて、身を修めむたづきともなりぬべき物をこそえり出づ

べけれ。賢女列婦の傳記、假名がきなるも漢文なるも。詞うるはしく、心優なる物語り文。よき人の道の日記。いたづらならぬ歌ものがたり。先は、この位にて足りぬべし。さても、この文の林にいりたちて、美しき詞の花を手折り、かぐはしきみををさめつゝ、かき流したる水ぐきの跡に、古人の淸き心をくみ、友を、千年の上にもとめて、心を、高ねの月にすましなむ、そのたのしびは、いかばかりならまし。山里にいりて浴みせむも、さりぬべけれど、そは、たゞ、形体の上の事なりかし。心の樂みは、いかでか、これに及ぶべき。さて、その次は、

●言の海　にあさるなりけり。およそ、我が國人としては、誰しも、御國の言の葉を知らざるべからざること、言ふまでもなけれど、わけても、女は優にやさしきを旨とせれど、常の言どひにも、消息の文の上にも、かど／＼しき漢語を用ゐむよりは、なだらかにすなほなる御國言葉を用うるこそ善けれ。さて、その言の葉を豐ねむとしては、また、言葉の海にあさりて、ふみ置ける千鳥の跡をたづね、そのすぢの歌、物語の類をよみて、よく、その意義を悟り、つかひざまをも、明めざるべからず。語の法、文の典など論へる書見むよりも、これは、また、面白かりぬべし。かくて、紀の國の濱よるてふ鮑玉拾ひ集めて、まかゞやく金銀にも勝れらむ、うるはしき文章を作りいで、和歌の浦囘にうちよする藻塩草かきあつめて、恐ろしき鬼神も、海人の潮たれ衣の袖しぼりつゝ、あは

れと思はむ程の歌詠みいでなむ、その樂みは、また、いかばかりならむ。さては、我が得意かむはどもおしはからるゝなりけり。耳に、波の音、松風の聲をきゝ、目には、はるけき海原をながめて、その身に、からき海水をかづかむ樂も、物の數かは。さて、これよりは、また、もとの、

㊂敎の庭に歸るなり。猶も、すさびのしなをえりいでなば、夏山木立いとしげくて、濱のまさごの數も知らざらるべし。されど、流れて早き月日には、しがらみも無ければ、心には、あきを知らざらめど、はだへ涼しき秋風は、とみにも音づれなむ。秋風たちなば、ふたゝび、もとの敎の庭にいりたちて、敎師の植ゑおふさむ千草の花を手をり、月の桂の枝をも折りそへて、終には、紅葉の錦を身に纏はむと心かけてよ。

[illegible]

安見しゝ吾大君の　常[illegible]宮と仕へまつれる
左日鹿野ゆ背に見ゆる　うきつしま清き汀に
風ふけは白浪さわぎ　潮ひれは玉藻かりつゝ
神代よりしかぞ尊き　たまつしまやま
わかの浦に潮みちくれはかたを波
蘆邊をさしてたづなきわたる
（萬葉集）

餘芳

心(こゝろ)つくし(つゞき)

税所敦子

まくらちかう、なやらふこゑども、きこゆれば、ゐかすがに、こよひに、とぢまりぬるも、心(こゝろ)ぼそう、おぼゆれば、

かず〳〵のうきをみはてし年(とし)なれどさすがにけふはをしくもあるかな」。春(はる)のひかりを、みるにつけても、おもひいづること、さま〴〵なれど、あたらしきとしのはじめとて、さすがに、こといみするも、われながら、なほ、あやしき心(こゝろ)なりや。ふるさとの、母君(はゝぎみ)のもとに、春(はる)のことぶきども、きこえまゐらすとて、

から衣(ころも)きみにあふべき春(はる)なればたちそむるよりたのしかりけり」など、かきすさぶものから、なほ、むかしのこと、つゆ、わすられず。こよなう、かはりにける、よのありさまをも、たれにかは、かたりきこえんなど、つく〴〵と、うち

ながめて、
しきたへの枕につもるちりをだにはらはで春をむかへつるかな」。にしでりの里には、梅も、のきちかう、はゝゑみそめ、雪のうちより、のどけきこゑも、まちいでしを、むつき廿日あまりにもなりぬれど、たえて、はつねだに、きゝえさりければ、
さもこそはわが世の外の春ならめ鶯さへもおとづれぬかな」。のきのたるひの、とけゆくまゝに、すこし、はしつかたまで、いざりいでたれば、垣こしにみゆる柳の、やゝ、みどりになりたるに、かも川のほとり、おもひいでられて、
わがせこがむかしむすびしかもがはの岸の柳はいまかもゆらむ」。よの中、すこし、あたゝかになりゆき、こゝちも、やう〳〵、おこたりさまになりぬれば、髪の、いみじう、むすぼゝれたるが、いと、いぶせきに、ふしどながら、けづりゐたるをりしも、れいならぬ人の、音なひするに、おどろきて、うちみやり

たれば、としごろ、よそにても、むつまじう、かたらひきこゆる、あまぎみの、とぶらひものしたまへるなりけり。まづ、涙さきだちて、ふと、ものも、いひいでぬほどに、いと、とう、きこえたまへりし。

見るまゝにはらひもあへず黒髪の末のうきめにあまるなみだを」。とかう、思ひめぐらすべきほどもあらでなん。

ひとすぢにはらひすてたるくろかみのつひにみだれぬ心ともがな」。つきごろ心ひとつに、思ひあまりぬることども、また、たれにかはとて、なにやかやと、かたりつゞくるに、かひありて、あへしらひつゝ、さすがに、のどかにもあらで、かへりたまへるなごり、いと、さう〴〵しう、うちながめられて、

きのふこそふりわけ髪はあげてしかはらふばかりにいつなりにけん」と、ひとりごちぬ。やう〳〵、くだるほど、ちかう、なりゆくまゝに、おもひつゞくること、さま〴〵にて、春夜ながら、ねざめがちなるに、曉かた、ほのかに、かり

のねの、きこえたる、いみじう、あはれなり。
故郷にかへるかりすらなくものをしらぬたびぢにいかにまどはん」。かう、さだまりたる旅ながら、しりくやうのひとは、しひても、おもひとゞまるべきやうを、とさま、かうさま、いさめらるゝに、いらへきこえむかたもなうて、
山かしのみひとつならばとにかくにおちとまりてもあらましものを」。はかなくて、二月もすぎぬ。都の春に、あひみむことも、いまは、いと、かたかるべきを、花見には、必ず、かたらひきこえし人の、其の比しも、旅に物して、あらざりければ、すべなうて、思ひたえてありつるに、朔日計りにや、あらし山に、いざと、いふひとのありければ、やがて、うちつれて、ものしつ。なか〳〵なるはたしにて、何しに、參りて來つらんとまでぞ覺えし。いと、いはけなかりしより、いみじう、心にしみて、おぼえつる地のさまなるを、まして、ことし計りこそと、おもふこゝち、なにのあはれにかは似む。花さへ、いまをさかりにて、

いはんかたなきけしきなるに、うちいづべきことのはも覺えねば、たゞ、「あらし山とし〴〵花はさくらめどいつの春をかわれはちぎらん」と、こゝろのうちにのみ、おもひつゞけてやみぬ。かのたびなる人をおもひいでゝ、「契りおきしひとこそみえねあらし山花のこゝろはかはらざりけり」。

（つゞく）

教の庭

八月五日兼題　旅宿鹿

（天地人のほかは原稿到着順なり）

天　　京都府愛宕郡上賀茂村　南大路正子

小男鹿の聲のあはれもまさりけりたびのやどりの秋のゆふぐれ

地　　府下本郷區森川町　三浦時子

故郷にかよふたびねのゆめさめてまくらに殘るさを志かのこゑ

人　　大坂市東區今橋筋二丁目　上野兼子

妻こふる鹿のなくねにくさまくらいく夜露けきそでしぼるらん

草枕つゆけくもあるかよもすがら
あはれをそふるさをしかの聲　佐々有鄰子

然らぬだにつゆけきものをくさ枕
あはれをそへてさを鹿の鳴く　小橋　幸子

草まくら結ぶゆふべのさびしさを
なぐさめがほに鹿ぞなくなる　千々波橘子

くさ枕ねざめてきけむふくる夜か
妻こふしかのこゑきこゆなり　溝口　直子

ふるさとゝ同じ音になく鹿のこゑ
旅のまくらにきくぞかなしき　伊東　海子

つまこふる鹿のなくねにふる里を
思ふたびねぞかなしかりける　高橋　政子

草まくらたびのをしかの妻こひに
かたしくよはの袖ぞつゆけき　藤澤　元子

草まくらたびねの床にきこゆなり
つきすむよはのさをしかの聲　山田　先子

をしか鳴くはつせの山の草まくら
家路のゆめもむすばざりけり　東　しめ子

旅ごろもきその山路ま行きくれて
うき秋を旅にやどりてゆふされば
淋しさまさるさをしかのこゑ　永易　瀧野

さやかにもきく鹿のこゑかな

旅寐してふけゆく夜半の鐘の音に
さびしさそふるさをしかの聲　羽田三緒子

然らぬだに秋の旅寐のさびしきを
いかにきけとや鹿のなくらん　羽田　高子

さらぬだに旅のまくらは淋しきに
妻こふしかのこゑぞきこゆる　花山やすえ

深山路の旅のまくらのさびしきに
なほもきこゆるさをしかの聲　花山みさを

然らぬだにさびしき旅の獨り寢に
あはれをそふる棹しかのこゑ　花山きのと

こえぬべき高根を見れば月かげの
紅葉にさしてしかぞなくなる　岡　増子

世の中の秋のあはれのかぎりかな
たびのねざめの小男鹿のこゑ　岡　すみ子

宿りせし旅のかりねのうたゝねの
まくらにひゞく小男鹿のこゑ　永易　幾野

然らぬだに旅のやどりの淋しきに　あはれもよほす小男鹿のこゑ　石井　德子

淋しさは宇都の山邊にたびねして　まくらに落つる小男鹿のこゑ　石井　龜子

打ちとけてねぬ夜あまたのたび枕　きくもかなしき鹿のこゑかな　高井　米子

さ夜更けて哀れ身にしむ鹿の音に　旅ねのとこはいとゞつゆけし　土生　淸子

つまこふる牡鹿の聲をかりねして　聞く夜ふる里こひしかりけり　瀨戸　里子

ひもとかぬ旅のかりねの淋しきに　遠くきこゆるさをしかのこゑ　土肥　仙子

ながむれば月もさびしきたびの宿　更けゆく夜半に鹿ぞなくなる　宗　績子

旅まくらさし行く月になくしかの　さよふけかたの聲ぞさびしき　倉掛　元子

ふるさとに通ひし夢を覺ましけり　草のまくらのさをしかのこゑ　田代喜和子

旅まくら寢ざめがちなる秋の夜に　つまとふしかの聲ぞさびしき　田邊　留子

さらぬだに物さびしかるたびの空　月もあはれになくしかのこゑ　渡邊　金子

秋の夜の更け行く月にきこゆなり　たびねさびしき小男鹿のこゑ　田邊　嶺子

さをしかのなくなる聲を秋の野の　草のまくらにきゝあかすかな　永井さい子

くさまくら旅ねの空のかなしきに　外山のおくにしかぞなくなる　碓井　信子

かりそめの旅ねの宿のかなしさを　鹿の鳴く音にろへてけるかな　碓井　武子

いとゞしく淋しき草のかり寢をば　なぐさめがほに鹿のなくなる　内田　慶子

草まくら紅葉のにしきかたしきて　きけど悲しきさをしかのこゑ　跡地　伊代

草まくら寢ざめに鹿のこゑきけど　みやこの秋のつきはものかは　跡地　志津

小ぐら山近きあたりにたびねして　よもすがらきくさをしかの聲　太田　兼子

旅ねする夜半の秋かぜ身にしみて　植木　鋼子
ふけゆく月にしかぞなくなる

草まくらながき思ひのあきの夜の　青木　春子
かなしさそふる小男鹿のこゑ

故郷をおもひ出でつゝくさまくら　中村　友子
ねられぬ夜半よ鹿ぞ鳴くなる

夕されど岸のまつかぜ身にしみて　川井田さよ
しかの音すなりうき旅にして

なく鹿の聲きくまゝにたびごろも　野尻　鶴子
かりねの床ぞわきてつゆけき

露かゝる旅ねのそでのものうきに　土屋　貞子
いとゞ秋なるさをしかのこゑ

ふけわたる鹿のなく音に夢さめて　南大路素子
淋しさそはるたびのやどかな

故郷のゆめはやぶれてあきのよの　南大路芳枝
まくらにちかき小男鹿のこゑ

草まくらかりねの床につき更けて　島田　悦子
あはれ身にしむ棹しかのこゑ

こよみさへなき山里にたびねして　藤田　濱子

鹿なく御代のあきを知りにき

故郷をしのぶ夢さへむすびあへで　武智卓能子
よたゞをしかの聲ばかりして

ゆきくれて露のはぎ原やどゝせむ　武智　龍子
つまとふ鹿のこゝら鳴くなる

たらちねの親をはなれて旅まくら　松井たまみ
寝られぬものを鹿さへぞなく

さらぬだにたびねさびしき山里に　田中　こう
うらかなしくもさを鹿のなく

草まくら旅のやどりのさびしきに　鈴木　久子
よたゞをしかの聲ぞきこゆる

我ならぬ人もあはれやまさるらん　中村　園子
たびねの宿にしかぞなくなる

たびぢねの眞葛が原のさびしきに　岡松　備子
妻とふしかのこゑあはれなり

草まくらむすびし野べになく鹿は　千日　文子
おのが妻とやわれを見るらん

小雄鹿のなくねあはれにきこゆ也　久保田律子
いとゞ露けきくさのまくらに

さらぬだにいとゞ旅寢のさびしきを　大鐘きよね
夜すがら鹿のこゑをきくかな

行きくれてくさひきむすぶ山里は　高橋たか子
つまこふ鹿の夜もすがらなく

ひとりゆく旅の假寢のさよふけて　佐藤敬子
妻こふしかのこゑのみぞきく

草まくらむすぶ夢さへさましけり　藤芳子
しかのなく音に驚かれつゝ

かたしきの袖も露けきくさまくら　河村かね子
むすぶとすれバさを鹿のこゑ

草まくらひと夜の夢をさましけり　河村國子
しかの遠音ぞわびしかりける

さよふけて小鹿なくなり草まくら　堀江花子
いくたび夢のおどろかれけむ

旅寢するかたしく袖のつゆけさに　堀江静子
ふくるもしらで小鹿なくなり

さらぬだにつゆけき秋の旅まくら　堀江松子
妻こふしかのいねがてにする

草まくら旅のやどりにきこゆなり　諏訪晴子
をはぎが原のさ男しかのこゑ

然らぬだに旅の寢覺のかなしきに　藥師寺芳子
などかは鹿のあはれそふらん

くさ枕むすびしゆめをさましつゝ　安藤鍵子
妻こふしかのこゑを聞くかな

旅ごろもかたしくよはの夢さめて　安藤義妙尼
まくらにひゞくさを鹿のこゑ

八月五日兼題

學問は何の爲にするか

天　千葉縣佐倉町宮小路町　植木鋼子

ますらをが其一身一生を學問の爲になげうちて勤めはげむは國の爲君の爲將又家の風をも起さんとて成るべしこは我國はいふもさら也外國々に至るもみなおなじ事なるべけれどひとり女は古しへより日の本のならひとて大方は親夫にしたがひ兒女を教育し家を治むる者なれバ男子と並び立て學問にのみ身をゆだぬるはいと〳〵難しされバとて親につかへ夫にしたがひ子をやしなひ家を治むると

元來かろき責にあらねバ普通の學びをなさでやはあるべき近頃女子の學びに志すものや丶もすれバ慢心といふにながれやすく事の次第物の前後もかへりみず口にまかせ筆にまかせ人もなげにおのれさかしらたつはいとかたはらいたき事ならずやさては古しへの清紫にも劣らぬ秀才を保つとも業と行とくひちがひたらんにはあたら學問も何のやうにかなるたとへ一字一言たりとも身を修め志をかたむる種とし世の常道をふみたがへじとかた時も怠らたらぬこそ學問の道とはいふべけれ

地

熊本縣菊池郡城北村　佐々有鄰子

學の道は大君には草むすかむね水つくかバねと忠に義に親夫には孝に貞に朝は朝めよくつとめ夕は夕さらずいろしみつくすぞ神ながらの正道にはありけるそも／＼くだちゆく世の悲しさは蟹が行きなす西洋の横さの道にふみまよひ貴孃も賤女も口には洋語をつかひ頭には夷なるかざし／＼しきかざりをなしていかにもくやしき道の學びに立入たるがいきどほりてもかひなき國躰とならんとすつとめたまへ今女ふるき學の道にいりたちたまひてふみしめたまへ姬とねたちわらはも孝と忠との道びと筋をこそふみかためつれ

人

府下麹町區下二番町　中村友子

學問の範圍はいと廣くして大空の限りなきが如くなれど其道をたどるもの五里霧中にさまよひあるは其道を踏迷ふものさへあるを畏れ多くも大御心をなやまし玉ひて勅語を下し玉へるなり

抑國家の開け行くといふも隆盛なりといふも必竟其國民の忠孝の心に富み仁義の念に厚きによれどなり我國の開け始めし昔より今の世に至るまで上は萬世一系の君ましまして政を行はせ玉ひ君の愛し玉ふと子の如く臣民の仰ぎ奉ると父の如きは則ち此の道のあれぞなり世界に國といふ國はいと多けれどかゝる君臣の分明に定まりとこしなへに替らざる國はあるとなしされバ世の中の開け行くに從ひて天外なる日月星辰の事を明らめ地上動植物の幺微の現象をも知りあるは化學と云ひ理學といひ種々の學問いと多くなりぬれどこはその枝葉のとなれバ先づ其基礎を固め益々我日の本の國の光を世界萬國に耀すこそ之れ學問をなす所以ならめ淺學をかへり見ずいとをこがましきとをかくなん

岡　ます子

近き頃女の學門進みきて天か下やむごとなき姬達

よりいやしき賤の女までなべて我も〳〵と此道に志ざし學の窓に集れど世の中に才ありかしこき女おほくなんありけるは目出度きことにこそされバ朝日に匂ふ櫻にもまさる言の葉つゞり昔の清紫の君もかくやとめではやさるゝ人こそ羨ましけれされどともすれど高慢てふあさましき罪に陥り少しの學問をほこりがほするはみにくしともみにくしこれころ學問により淑徳を損ふなれど世のそしりも受るなれかくては實に口惜きかぎりになむされバ學問によりていや深く智を研きいや高く徳をつみ敷しまの大和に生れしかひあるものとなり益良武雄が武具もて國を守ることと心のまことたゆまずして御國の爲思へかしかゝる志ある女は行末は賢母ともなり良妻ともなりなんさもなくど百千々の文よむともなにの甲斐かあるべき世の女子達心して學の道をつとめ玉へよ

島田　悦子

嘗て學の道にいとくらき人の言ひし事を聞きけるに學問は徒らに時を費やすのみにて其甲斐なきものかな古へより學びの道に深入りせし人の財を貯へ奇麗なる住居をなすものゝ少なさよといひけり嗚呼なげきても餘りある言ひ草かなと獨りうなづきし事のありけるが斯様のものは學問の何ものたるをも辨へざるおかしなり又古へより字を知らぬ不自由とて目に一丁字を知らずして圖らぬ損害を被れる廉々あげたるもありけるが妄知き學びの道のたどり兼たるものにしあれどもつら〳〵考ふれバ學問は徒らに不自由なからん爲に學ぶにあらざる事とこそ思はるれ故に學者は必らず貧しとも言はれ難したとへ貧しながらも無學のものゝ如き心はいさゝかなく何彼のやうに不善の淵に陥らぬものなり昔し孔夫子の言はれし耕すや餒其中にありとされバ其の心情常々愉々として形の爲に心を結ぼれず限りなき幸福を得ること無學のものゝ得て知り得られざること聊かも疑ふまじきなりさはあれど字を知るバかりにてはなく心の正を求めて此道の奥また奥をさぐるこそいと肝要ならめ

千日　文子

人のふみよみ物まなぶはあながち位山たかくのぼらんとにもあらずたから多からんことをねがふ爲にもあらざるべし心すなほに僞りなくよろづさとりよく物にまどはざらんことをねがふにこそあらめいかに文よみ才たけたれどとてほこりがにものいひのゝしり人の身の上をそしり何事によらずさし出づるはまことにおろかなることゞもにぞありけるものにあらそはず己をまげて人にしたがひ我

身を後にして人を先にするにはしかずと古き書に見えたるはさもことわりになんありけるされバ學問はたゞやさしくまめやかなる人とならん心ぞへを知るためにこそあんなれをさ／＼人の世にやくなきぞちゞ／＼しきことゞもをまねぶにはあらずとかやうけたまはるになん

藤　芳子

世に尊き物あまたあるそが中に學問して是を行ふ程たふときはなかるべし昔より賢婦烈女と名をのちの世に殘し人の鑑となり給へるは生れながら得たるかいな然にあらず幼きころよりつとめまなびて身を勞しことに愼みてこそ此名を得たるなれ是皆學問の德とはいふなりされバ人たらんものは今の尊き御世に生れあひたる甲斐にまなびの道に心をとめて女は女の道を知り賢母良妻となりて良人を扶け兒子をそだて御國の恩を報いずして可ならめや

安藤　鍵子

學の庭におりたゝむはあながちに外國ぶりにならはむとにはあらでわが御國風を學ぶをぞ旨とすべきことさへぐ外國人の敎はしらず吾が大御國はちはやぶる神代より女は優にやさしきをむねとし立ちゐふるまふさまより物いふけはひに至るまですべてをだしくなつかしく家にありては萬まめやかに夫をたすけて怠らず幼きをバいとつき／＼しくはぐゝみ立て事あらん折には雄々しきふしを立てんことげに神ながらの道にして古より文學ぶ女のむねときはめしにこそさるを近き世あやしき敎のまひてしより文の林わけ入る女子はなか／＼にあらずくるをしき方にのみ流れゆきてあるは男女同權あるは權利義務などあられぬまが說にのみまどひて父母をしも省みず夫をもかろしむるなど云ふかひなきひが事にはては世の文學ぶ女はかゝる事をせんとにやなどいひあなづらるゝはいと口をしからずやはこはこれ一向に外國風にのみめなれて未だわがまことの道しらぬひが思ひにしてかゝやうの者はなか／＼に文みぬ方なん良しかるべきされど學の道に入りと入らん女子ははやく神隨の道をきはめあられぬ方には心もひかれでわりこしわが御國ぶりの女とならんには家に國によなきいさをにてかくてこそ學びしかひもあるべきなれ

正誤

前號本欄文の中地と人との投稿者の宿所を脫落せり即左の如し

地　愛知縣中島郡山形村　安藤義妙尼
人　仝上　安藤鍵子

國光は忠孝節義の士氣を激勵し固有の美風良俗を扶植し以て邦家進取興隆の基礎を鞏固にし殖産軍備教育の法廣く宇內の秀美を蒐め富強の策を講ずるを務とす其時事を評し活勢を論ずるに當りては公平の眼を以て大局の上より國家の利害を觀察し太古に溯り萬世に亘り時流を趁はず世好に投せず卓然獨立正言公議眞理中道を得以て國光を世界に照被するを旨とす

國光

每月二回發行
十日廿五日
一册代金拾三錢
但全國無遞送料

國光第六卷第七號目錄

發行所
麴町區平川町五丁目
國光社

女鑑第四十三號目次

(明治二十四年八月八日內務省許可)
(明治廿五年三月十二日遞信省認可)

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京麴町郵便局へ御振込可被下事○郵便劵を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收書差出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若し强て領取證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事○未梲の來書は一切受取不申候事

女鑑

每月二回五日廿日發行

定價壹册金十錢
三ヶ月前金五十五錢
半ヶ年前金壹圓
但全國無遞送料
廣告料五號字廿三字詰一行金二十錢

明治廿六年八月四日印刷
同年同月五日發行

東京麴町區平川町六丁目十二番地
發行兼印刷人　川崎直衞
東京麴町區平川町五丁目十六番地
編輯人　山根勇藏
同
發行所　國光社

(赤坂區赤坂田町二丁目十五番地國光社印刷部印行)